

# 目次

## 鳥 類

<b>I. 基本事項</b> .....	64
1. 飼養動物選択上の留意事項.....	64
2. 終生飼養.....	64
3. 適正飼養.....	65
4. 迷惑と危害の防止.....	65
5. 生物多様性の保全.....	66
6. 関係法令.....	66
<b>II. 共通事項</b> .....	71
1. 鳥類の基礎知識.....	71
2. 飼育管理.....	73
3. 購入に当たっての留意事項とチェックポイント.....	74
4. 鳥類の病気と健康管理.....	75
5. 人と動物の共通感染症.....	81
<b>III. 種類ごとの個別事項</b> .....	84
1. フィンチ.....	84
2. カナリア.....	90
3. キュウカンチョウ（九官鳥）.....	91
4. すり餌鳥（軟食鳥）.....	92
5. セキセイインコ.....	93
6. 中型インコ類.....	94
7. 大型オウム・インコ類.....	95
8. ハト類.....	97
9. ニワトリ.....	98
10. キジ類.....	99
11. 水禽類.....	99
12. 猛禽類.....	100
<b>IV. その他</b> .....	102
1. 野生の雛鳥を保護したとき.....	102
2. 足環のついている鳥を見つけたら.....	102
<b>V. 参考</b> .....	103
〈引用及び参考資料等〉.....	103

# I. 基本事項

## 1. 飼養動物選択上の留意事項

動物の飼養に当たって、その種類や品種を選ぶ上で考慮すべき事項は次の通りです。

- (1) 飼養目的
- (2) 動物の特性  
それぞれの動物種の生態、習性、生理、食性、適応環境、知能、運動能力、力の強さ、行動パターン、気質や性質（成長に伴う変化、繁殖期の変化等も含む）、成長した時のサイズ、力量、性別、品種による気質や運動要求量の差、寿命等。
- (3) 飼養環境  
必要空間、住宅環境。
- (4) 経済的負担
- (5) その他
  - ・ 家族の同意
  - ・ 家族構成とそれぞれの年齢
  - ・ 家を留守にする時間
  - ・ 他に飼っている動物の有無、種類、年齢、性別
  - ・ 今までの飼養経験

## 2. 終生飼養

動物を飼い始めるときは、途中で飼育を放棄することなど絶対ないと、誰もが考えているのではないのでしょうか。特に小鳥の場合は寿命が短いものも多く、飼育禁止の住宅も少ないので、問題は比較的少ないといえるでしょう。

しかし、なかには転居、近隣からの苦情、子供のアレルギー等の理由により飼えなくなってしまいう例が見られますし、ヒヨコがニワトリになって持て余してしまうというのは、昔からよくあったことです。

また、鳥類のなかには10年から30年以上生きるものも多いので、このような種類の鳥を飼う場合は、その長い期間責任を持って飼い続けることができるかどうか飼い始める前に十分検討する必要があります。

動物を遺棄する（捨てる）行為は、「動物の愛護及び管理に関する法律」により処罰される違法行為です。

鳥の場合、飼えなくなったら放してやれば生きていけると安易に考える傾向がありますが、飼われていた鳥は警戒心が薄く、猫などに襲われる等生き延びる可能性は高くありません。

また、生き延びたとしても環境や野生動物の生態系に影響を与えることが考えられます。

一見「自由にしてやる」というよいことのような響きがありますが、飼い鳥を放すことは捨て犬、捨て猫と同じく犯罪行為だということを理解してください。

### 3. 適正飼養

動物の飼い主には適正飼養が義務付けられています。この動物を適正に飼養するということには2つの意味があります。

1つは、その動物の生態、習性、生理等を正しく理解して、動物が健康に生活できるような環境で飼育するということ。もう1つは、その動物を飼うことにより、周囲や近隣に迷惑をかけることのないようきちんと管理して飼育するということです。

動物の健康と周囲の環境に対する配慮の両面を考えて、適切な飼育設備を整え、正しく飼育管理しなければ適正飼養とはいえません。

#### (1) 動物の健康に対する適正な飼養

まず、鳥の大きさや羽数に応じて十分な広さの鳥かごや禽舎、適度な温度、湿度、採光のとれる飼育場所、食性に合わせた餌などを確保しなければなりません。

毎日の飼育管理では、一般的に鳥は飢餓に対する抵抗力がなく、餌を切らすとすぐに死亡してしまいますから、餌の管理が特に大切です。また、それぞれの種類の生態や習性に応じた飼育方法がありますので、それを十分理解して飼育に当たる必要があります。

#### (2) 近隣環境に対する適正な飼養

室内で少ない羽数を飼う場合は、汚物や羽毛などの処理は比較的こまめに行えますが、屋外に禽舎を設置している場合や、多数飼育している場合は管理が雑になりがちなので、十分な注意が必要です。

また、住宅密集地域でニワトリなどの鳴き声の大きな鳥を飼うことは、相当の設備と周囲への配慮がなければできないことでしょう。これは、飼い始める前に十分考えなければならぬことです。

### 4. 迷惑と危害の防止

#### (1) 近隣への迷惑の防止

保健所等に寄せられる飼い鳥に関する苦情の主なものは、

- ・清掃の不徹底による羽毛、糞の飛散
- ・多数飼育による臭い、害虫の発生
- ・ニワトリ、オウム等の鳴き声

などです。

これらの苦情の原因の多くは、飼い主が適正飼養の義務を果たしていないところにありま

す。自分たちさえよければという身勝手な考え方では、地域の理解を得られないだけでなく、苦情などの問題が発生することになります。

地域の中で人と動物が調和のとれた生活をしていくためには、動物の飼い主と飼っていない人の相互の理解が欠かせません。それにはまず、飼い主が周囲の人の立場を考慮して責任ある飼い方をすることが最も重要です。

また、コミュニケーションが希薄な地域では、些細な問題が苦情や大きな揉め事に発展する傾向があるので、近隣関係を良好に保つような配慮も必要です。

## (2) 人への危害の防止

鳥類のなかでも猛禽類や大型の鳥を飼育する場合、種類によっては危険な動物に指定されていて、都道府県知事の許可が必要な場合があります。許可を受けるためには基準に適合した飼育施設を準備しなければならないので、事前に都道府県の担当部署に問い合わせてください。

許可が不要な種類でも大型の鳥を飼う場合は、人に危害を加える恐れのない施設の中で相当の注意を払って飼育管理しなければなりません。

## 5. 生物多様性の保全

地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全し、生物資源の持続的利用を目的として「生物多様性条約」が締結されました。これに基づくわが国の「新・生物多様性国家戦略」では、ペットの遺棄や逸走による移入種による生態系の攪乱を生物多様性の危機のひとつと位置づけています。

ペットショップなどで売られている鳥類は、ほとんどが海外から輸入されたものです。これらが故意または過失で自然のなかに放たれると、交雑、捕食、食物競合による圧迫などにより、日本在来種が大きな影響を受ける場合があります。また、感染症の媒介、農作物の被害など、人の生活に直接影響を与える場合もあります。

いったん国内の環境で繁殖して個体数が増えると、これを捕殺するなどコントロールしていくために膨大な経費がかかることになります。これらの鳥を飼う場合は、特に終生飼養と逸走させない確実な管理が不可欠です。

## 6. 関係法令

### (1) 動物の愛護及び管理に関する法律

動物の虐待防止、動物の適正な取り扱い等を通じて生命尊重等の情操かん養に資するとともに、動物による人の生命、身体、財産への侵害を防止することを目的として、飼い主の責務、動物販売業者の責務、動物取扱業の規制、危険な動物の飼育の規制、犬・猫の引取りなどを規定しています。

(2) 家庭動物等の飼養及び管理に関する基準

動物の愛護及び管理に関する法律に基づいて、家庭等で飼育される動物の取り扱いについて具体的な基準が示されています。

(3) 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律

鳥獣の保護を図るための事業を実施するとともに、鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の防止、猟具の使用に係る危険を予防することを目的としています。

鳥獣の捕獲等の規制、鳥獣の飼養、販売等の規制、鳥獣保護区の指定などを規定しています。

野生鳥獣の捕獲は、原則として都道府県知事の許可がなければできません。

また、傷ついた鳥を保護したり雛を拾ったりした場合も、種類によっては飼育することができませんので、都道府県の担当者の指示に従ってください。

(4) 家畜伝染病予防法

伝染病が発生した場合の届出、患畜の隔離、消毒などを行うことにより、家畜の伝染性疾病の発生、まん延を防止し、畜産の振興を図ることを目的とした法律です。

表1および表2にこの法律で指定している法定伝染病および届出伝染病を示しましたので参照してください。

表1：鳥類の法定伝染病

法定伝染病	鳥の種類
家きんコレラ	鶏、あひる、うずら、七面鳥
高病原性鳥インフルエンザ	
ニューカッスル病	
家きんサルモネラ症 (サルモネラ・プロラム、サルモネラ・ガリナラムによるものに限る)	

表2：鳥類の届出伝染病

届出伝染病	鳥の種類
サルモネラ症(サルモネラ・ダブリン、サルモネラ・エンテリティディス、サルモネラ・ティフィムリウム及びサルモネラ・コレラシスによるものに限る)	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鳥インフルエンザ	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鶏痘	鶏、うずら
マレック病	鶏、うずら
伝染性気管支炎	鶏
伝染性喉頭気管炎	鶏
伝染性ファブリキウス嚢病	鶏
鶏白血病	鶏
鶏結核病	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鶏マイコプラズマ病	鶏、七面鳥
ロイコチトゾーン病	鶏
あひる肝炎	あひる
あひるウイルス性腸炎	あひる

(5) 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

昔の伝染病予防法が改正されたもので、感染症の予防とまん延の防止を目的として、新感染症などに迅速に対応することができるよう、医療等に関する措置を定めています。

主な感染症を5つの種類に分けて対策を講じていますが、このなかで四類感染症に定められている疾病には、人と動物との共通感染症が多く含まれています。

(6) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）

野生動植物が、生態系及び自然環境の重要な一部として人類の豊かな生活に欠かすことのできないものであることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存を図ることを目的としています。

捕獲及び譲渡の禁止、国際希少野生動植物種の個体登録、生息地等の保護に関する規制などを規定しています。

表3にこの法律で指定されている国際希少野生動植物のうち主な鳥類を示しましたので参照してください。

国際希少野生動植物種は、商用目的で繁殖された個体でも、登録したものでなければ販売、譲渡、陳列はできません。譲渡、売買にあたっては、登録票があることを必ず確認してください。また、販売、頒布目的で陳列するときは、登録票を備えつけないけません。

表3: 国際希少野生動植物として指定されている主な鳥類(平成 15 年7月 20 日現在)

アカノボウシインコ	アカミコンゴウインコ	フクロウオウム
キボウシインコ	シロビタイムジオウム	コンセイインコ
アカオボウシインコ	フィリピンオウム	ミノバト(キンミノバト)
オウボウシインコ	オオバタン	ミンドロミカドバト
ミカドボウシインコ	アオコンゴウインコ	(ミンドロオビオバト)
サクラボウシインコ	チャムキガシラアオハシインコ	マダガスカルメンフクロウ
キエリボウシインコ	アオハシインコ	モリコキンメフクロウ
マツバヤシキボウシインコ	イチジクインコ	オニコノハズク
アマナ・オクケアラ・カリバエア	ヤクシャインコ	ニュージーランドアオバズク
オオキボウシインコ	ハイワインコ	クリスマスアオバズク
アシボソキエリボウシインコ	ヒメフクロウインコ	カギハシハチドリ
オオキボウシモドキインコ	ニョオウインコ	ケツアール
アカソデボウシインコ	アカハラワカバインコ	アオオビカザリドリ
アカボウシインコ	キミミンコ	ハジロカザリドリ
カラカネボウシインコ	キジインコ	クロハラシマヤイロチョウ
イロマジリボウシインコ	ヒガシラインコ	コンコンヤイロチョウ
ブドウイロボウシインコ	ヤシオウム	ニシオナガムシクイ
メキシコアカボウシインコ	ヤマヒメコンゴウインコ	ハシナガヒゲムシクイ
アカビタイボウシインコ	アカビタイヒメコンゴウインコ	ハゲチメドリ
スマレコンゴウインコ属全種	ヒスイインコ	ズアカハゲチメドリ
ヒワコンゴウインコ	ディシミリスヒスイインコ	ノーフォークメジロ
アオキコンゴウインコ	ゴクラクインコ	カブトミツスイ
コンゴウインコ	シマホンセイインコ	キバラムクドリモドキ
(アカコンゴウインコ)	アオマエカケインコ	ショウジョウヒワ
ミドリコンゴウインコ	ハシブトインコ属全種	カンムリシロムク

- (7) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (CITES)  
通称ワシントン条約と呼ばれ、絶滅の危機に瀕した野生の動植物を、国際取引を規制することで保護していくことを目的とした条約です。  
条約では絶滅が危惧される野生動植物の種類を、その度合いに応じて「附属書I・II・III」に区分しています。附属書Iに掲載される種は最も絶滅が危惧されており、商業目的の国際取引が原則的に禁止されています。
- (8) 動物愛護管理関係条例  
このほか、法律に基づいて都道府県で制定している、動物の飼養に関する条例があります。各都道府県によって内容に違いがありますが、危険な動物の飼育の許可制、犬・猫の引取り、犬の逸走防止などが規定されています。  
また、区市町村で条例を制定しているところもあります。内容についてはそれぞれの自治体の担当部署に問い合わせてください。
- \* 次の法令等は、環境省のホームページ (<http://www.env.go.jp/>) から法律全文をダウンロードできます。
- (1) 動物の愛護及び管理に関する法律
  - (2) 家庭動物等の飼養及び管理に関する基準
  - (3) 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律
  - (6) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
- \* 次の法令等は、総務省行政管理局の「法令データ提供システム」(<http://law.e/gov.go.jp/cgi/bin/idxsearch.cgi>) で検索できます。
- (4) 家畜伝染病予防法
  - (5) 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律
- \* 次の条約は、トラフィックイーストアジアジャパンのホームページ (<http://www.trafficj.org/>) に概要が掲載されています。
- (7) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (CITES)

## II. 共通事項

### 1. 鳥類の基礎知識

#### (1) 鳥類とは

鳥類は羽毛に覆われ、飛翔力を持ち、卵を産んで殖える恒温動物です。昆虫やコウモリなども空を飛びますが、翼を使って飛翔するのは鳥類だけです。ダチョウやペンギンなどの飛べない鳥は、走ったり泳いだりする能力に優れ、飛ばなくても生きていけるようになった鳥です。

#### (2) 分類

鳥類は哺乳類や魚類と同じ脊椎動物のなかで、鳥綱というグループを形成しています。現在地球上には約8,600種の鳥が生息し、27の目、さらに約150の科に分類されています。スズメを分類単位にしたがって分類すると、動物界・脊椎動物門・鳥綱・スズメ目・ハタオリドリ科・スズメ属・スズメということになります。

#### (3) 進化

鳥類は爬虫類から進化したもので、羽毛は鱗から発達したものです。始祖鳥が見つかったのが約1億5,000万年前のジュラ紀後期で、ジュラ紀から白亜紀にかけて小型の羽毛をもった恐竜から鳥類が進化したと考えられています。”

#### (4) 形態・生理

鳥類の体は、空を飛びやすい形や造りになっています。羽や骨は丈夫で軽く、飛ぶための強い筋肉を持ち、食物や暮らし方にあった嘴(くちばし)や足をもっています。鳥の目は外見からは小さく見えますが、頭の中に大きな目がかくれている、たいへん目がよく遠くの獲物や敵を見つけます。体を軽くするため、腸などの消化管は短く、速く消化して糞もすぐに排泄します。

大部分の鳥の羽は年1回繁殖が終わった春から夏にかけて抜けてはえかわります。これを換羽といい「とや」とか「毛がわり」ともいいます。病気ではありませんが、鳥自身の変調期ですので、種類によっては餌や世話の仕方などに工夫が必要です。

鳥の雌雄鑑別は、キジ類のように外見で明らかなグループと、見た目には判りにくいグループがあります。見た目に判りにくい種も、種ごとにわずかな雌雄の差があり、慣れてくると見分けられるようになります。ハト類やカナリアのように繁殖期のディスプレイや鳴き声で雌雄を鑑別できるものもあります。

表4: 鳥類参考データ

品 種	全長(図 1)	産卵数 (個)	孵化日数 (日)	巣立日数 (日)	性成熟 (カ月)	平均寿命(最 高)
ジュウシマツ	10	5~8	14	21~25	4~6	5
ブンチョウ	14	5~7	14	28	7~8	7(16)
キンカチョウ	10	3~7	13	18	6~10	5
カエデチョウ	10	5~7	12	21	6~9	4~5
ハウコウチョウ	10	5~6	12	21	6~9	4~5
ベニスズメ	9	4~5	12	21	6~9	8
ナンヨウセイコウチョウ	11~12	5~6	14	21	6~9	7
ヘキチョウ	11~12	3~7	12	21	6~9	5
キンランチョウ	12~13	3~4	14	15	6~9	7
カナリア	12~21	4~6	14	14~22	6~12	10(24)
キュウカンチョウ	30	2~3	14	20~28	1~2年	8
セキセイインコ	18~23	4~7	17~18	28~30	4~6	7~10(20)
コザクラインコ	16~17	4~6	23	40	12	10~15
キエリボタンインコ	14~15	4~6	23	35~38	6~12	10~15
オカメインコ	32	4~7	22~23	45	6~12	15~20(30)
ナナクサインコ	30	4~7	19	35	12	15~20
タイハクオウム	45	2	28	120~180	3~6年	40
キバタン	45~52	2~3	25~27	60~80	3~6年	30~40(56)
ベニコンゴウインコ	90~95	2~3	26	95~120	3~7年	40
ハト	31~34	2	18	30	10	10~15(35)
ウスユキバト	19~20	2	10	12	6	6~8
ヒメウズラ	12~15	7~8	16	1	3	4~5
キンケイ・ギンケイ	61~115	6~12	22	1~2	12	12
ニワトリ	60※	10~365	21	1~2	6~8	10(30)
アヒル	40~71※	10~40	28	1~2	6~7	10(19)
コブハクチョウ	125~160	4~8	35~36	120~150	3~5年	20~30
オシドリ	41~51	9~12	28~30	40~45	12	10~15

※品種により数値が大きく異なります。

## 2. 飼育管理

### (1) 飼育環境

鳥にとって有効で快適なスペースを用意することが、よい飼育環境をつくりだします。鳥が隠れられて休める安全な場所や、安心して止まれる止まり木、清潔な餌や水と容器、種によっては遊び道具を鳥かごや禽舎に用意するのが理想的です。飼われる鳥にとって、そうした飼育環境と同じ、あるいはそれ以上に大切なのは、飼い主、すなわち実際に世話をしてくれる人という環境です。飼う人が小学生のお子さんか、時間に余裕のあるお年寄りか、初心者か経験者かなど、まず世話をする人にあった鳥を飼うことをお勧めします。

### (2) 換気

鳥の健康のために新鮮な空気を入れ替えます。窓や戸を細めに開けっぱなしにすると隙間を通る流れ風ができ、かえって風邪を引かせる恐れがあります。冬の寒い日などは空気の温まった午前10～11時ごろに、短時間窓を大きく開けて換気をするとういでしょう。屋外の禽舎なら通風のよい場所と風の通らない場所を作り、鳥自身が居場所を選べるようにします。

### (3) 採光

鳥の成長や健康のために日光浴も大事です。1日15分間でも日光にあたることで、ビタミンDの形成を促し、成長を促進します。夏の強い日光の直射にあうと日射病にかかることもあり、夏なら朝のうちに日光浴をさせるなど、季節により工夫が必要です。大きな鳥かごや禽舎なら日の当たる場所と当たらない場所を作り、鳥自身が好きな時間に日光浴ができるようにするとよいでしょう。

### (4) 温度・湿度

気温が高すぎたり、低すぎたり、風通しが悪く蒸れてしまわないようにすることが大事です。飼い主と同じ空間で飼う場合は、人の快適な気温、湿度で飼えば問題ありません。留守にする時間には、高温あるいは低温にならないよう鳥かごの置き場所などの工夫が必要です。最近ではエアコンで鳥にも快適な気温、湿度をつくりだすことができるようになりました。

### (5) 禽舎

鳥をもっとのびのびと飼うことを実現してくれるのが禽舎です。禽舎はふつう金網の日差しを差し込む方向が南向きか東向きに建てます。全体が屋根に覆われた屋内式、半分が屋根に覆われた半露天式、天井全体が金網で屋根のない露天式があります。雨の多い日本では半露天式が鳥の健康のためによいでしょう。禽舎も飼う鳥の種類により、構造や材質が異なります。木を齧(かじ)るインコやオウムの禽舎は太めの金網を使い、骨組みも鉄など金属製が理想です。水鳥の禽舎は池が必要ですし、キジ類だったら砂あびのできる床が必要です。屋外の禽舎の鳥は犬や猫、あるいはイタチなどに襲われることがあります。土台の強度、金網の網目の大きさ、扉の構造など、害獣が侵入しないよう頑丈につくることが肝心です。

### (6) 鳥かご

鑑賞用、繁殖目的、鳴き声を楽しむなど、鳥を飼う目的により鳥かごも様々な種類があります。材質もいろいろなものが使われ、竹、木、金属などのほか最近ではプラスチック製のものも作られています。金属製の角型や丸型のかごは鑑賞用に向いています。オウム類は嘴の力が強いので、太い丈夫な金属製のかごで飼います。ウグイスなどの声を楽しむために、日本では昔から竹かごが使われてきました。庭(にわ)箱(こ)は木製の箱状のかごで、繁殖用に適しています。

### (7) 掃除

鳥かごや容器は常に清潔にしておくことが、大事です。日頃は汚れが目立つところなどをまめに掃除し、月1回くらい全体の大掃除をするのがよいでしょう。たとえば、ペアのブンチョウだったら1週間に1～2回、かごの床の新聞紙をとりかえ、月に1～2回天気の良い日を選び、かご、止まり木、餌入れなど全部を水洗いし、日に干して大掃除をします。

### (8) 衛生

普段から掃除をまめにして、飼育環境の清潔さを保つことが、鳥を健康に飼うことの第一歩です。鳥かごや餌入れなどに熱湯をかけてから洗って日に干すことで、細菌や寄生虫を駆除できます。薬剤での消毒に比べ、日光や熱湯消毒は鳥にも人にも安全な消毒方法です。ただし、病気や寄生虫の種類や発生状況によっては、薬剤を使った消毒も必要になることがあります。

#### (9) 飼料

鳥の種類により与える餌の種類や量は決まっています。まき餌鳥に与える穀類、すり餌鳥に与えるすり餌、養鶏用の配合飼料、ハト用配合飼料、猛禽用の肉や魚、それに昆虫、菜、ポレ一粉（カキ殻：着色していないもの）など鳥の種類や状況によりいろいろな餌を使用します。餌は常に毎日新鮮なものが食べられるようにすることが大事です。殻つきのアワやヒエでは殻だけが残っていることがありますから、毎日確認します。自動給餌器などを使うときは、残りの量の確認を怠らず、餌の清潔さを保つことが大事です。

#### (10) 水

飲水は毎日新しく取り替え、いつでも新鮮な水を飲めるようにしてください。自動給水器を使うときは残りの量の確認を怠らず、容器に水あかなどが出ないようにこまめな管理をしてください。水浴びの好きな鳥では水浴び用の水も用意しますが、狭いかごでは周りを濡らしてしまうので、天気の良い日などに時間を決めて水浴びをさせてもよいでしょう。

### 3. 購入に当たっての留意事項とチェックポイント

「鳥を購入する」ということは、慎重に決定すべき極めて重要な行為です。特に小鳥は安価であることから、安易に衝動買いしてしまうケースがよく見受けられます。鳥も私たちと同様、地球上に暮らすかけがえのない生き物であることを認識し、適正な環境下で終生飼養することを前提に、鳥の健康と安全を確保する義務と、近隣への迷惑防止など社会的責任を負うことを自覚した上で、鳥の購入は決定すべきです。また、鳥も生き物ですから、数多くの病気にかかります。たとえ購入時に安価であったとしても、疾病の治療には料金が発生し、購入金額以上の費用がかかることも承知しておくべきです。

鳥を購入する際、まずは希望鳥種を決めましょう。飼い主の好き嫌いも重要ですが、飼育環境、例えばアパートの一室で飼うのか、庭付きの一軒家で飼うのか、飼育スペースの大きさ、飼い主の家族構成や年齢、他の飼育動物の種類や数なども、購入する鳥種を決定する重要なファクターになります。一般に鳥類は長寿です。セキセイインコでは10～15年、上手に飼うと20年近く生きますし、大型のオウム類に至っては80年以上も長生きした例があります。そうになると、飼い主の年齢によっては、次の世代に引き継いで飼育することも考えなくてはなりません。そこまでではなくても、5年、10年、あるいはそれ以上の長い年月を家族として生活を共にするわけですから、ご家族全員の同意と協力が必要になることはいまでもありません。また、大型の白色オウム類や鶏のオスは、雄叫びに近い大きな鳴き声を発しますし、水禽類では水浴場や広い運動スペースの確保が必要になります。広い庭付きの一軒家なら飼育は可能ですが、狭いアパートの一室では近所迷惑にもなりますので、飼うことができません。現在の飼育動物とのかね合いもまた重要となります。さらに、犬や猫と比較して鳥類では複数飼育をすることが多いですが、鳥種による相性や適正な羽数についても考慮しましょう。購入してしまってからお互いに不幸な結果となる前に、あらかじめ生理・生態をしっかりと調べた上で、鳥種は決定すべきです。次に、購入するペットショップを決めましょう。実際に足を運んでみて、鳥の飼育管理がしっかりされており、鳥に関する知識や経験が豊富な店員さんのいるペットショップなら安心です。鳥との接し方や飼育するに当たっての注意点・疑問点など、親身になって相談ののってくれるペットショップを選びたいものです。最後に、購入する個体を決めましょう。膨らんでじっとして動かなかったり、鼻水が出ていたり、下痢をしているような個体は避けて、元気で活発な健康個体を選びましょう。また、特に大型のオウム・インコ類の場合は、お目当ての鳥との相性をみるために、できればご家族の方と一緒に、少なくとも3回はペットショップへ通って欲しいものです。また、給餌の時間に行き、餌の食べ具合を見ておくのも重要

です。

また、ワシントン条約（CITES）、その他の法律関係のことも念頭に入れ、購入希望鳥種および購入個体が繁殖個体であるか、野生個体であるかも確認してください。野生個体の場合、鳥種によっては法律に触れることもありますし、多くの未知の病原体を持っていることもあります。また、できればCITESに関連する書類（輸出国CITES管理当局発行の輸出許可証や経済産業省の確認申請書など）が入手可能な場合があるので、ペットショップに訊いてみるべきでしょう。これにより、その個体の年齢や性別などが判るとともに、国内での移動、譲渡および疾病時にその書類が必要なこともあります。すり餌鳥などに関しても輸入個体かどうかを確認して購入する必要があります。

さて、新しい鳥を迎えるに当たって、まず健康診断を受けに動物病院に行きましょう。購入直後が無理であれば、少なくとも1週間以内には連れていくようにしましょう。動物病院によっては鳥を診察していない所もあるので、あらかじめ調べておくことが大切です。できれば、鳥類をよく診ている獣医師のいる病院を探しておきましょう。また、家庭内では、先住動物とのかね合いも重要です。購入7～10日間は購入個体が落ち着いて、新しい生活に慣れてくれるように、安静にしてあまり構わず、観察を重視すべきです。特に同一種の鳥類を複数飼育している場合、新しい個体をすぐに同居あるいは同室にしてしまうと、その個体が感染症を持っていた場合、全羽に感染が広がる可能性があります。できれば別室にして、購入個体の様子をよく観察し、衛生面に気をつけた上で、同室あるいは同居させることをお勧めします。最初の1～2週間はできるだけペットショップと同じような飼育管理（餌や生活リズム）を心がけ、特に雛、若鳥の場合には、給餌についてのしっかりとした知識を持って臨むことが必要です。

## 4. 鳥類の病気と健康管理

朝起きたら小鳥が死んでいた…という話はよく聞きます。鳥は「病気を隠す」生き物です。これは自然の生態系の中で一番弱い生き物だからです。犬や猫と比較して、鳥の医学は発達していませんし、検査や治療にも限界があります。ワクチンなども家禽類を除いてありません。だからこそ、「早期発見・早期治療」が必要です。少しでもおかしいと思ったときにすぐに動物病院へ行かないと手遅れになることも少なくありません。そして病気にさせないための「予防医学」が最重要であり、知識を身につけた上で適切な飼育管理が小さければ小さい生き物ほど大切です。

### (1) 主な病気とその予防

鳥は哺乳類と比較して明らかな症状を出しません。羽が膨らんでいる、寝る時間が長い、食欲が落ちている、下痢をしている、といった症状が多くの病気に共通してみられます。また、病気のほとんどが栄養障害や不適切な給餌など、飼育管理に起因することが多いようです。特に、3～4週齢前後の若鳥は、親からの免疫力が消失する時期とちょうど一致するためか、多くの疾病にかかりやすいようです。

鳥の羽が膨らんでいて寒そうにしていたり、日中でも長い間、背中に顔を埋めていたら病気ですから、まずは暑がらない程度にまで暖めてください。

#### ① 多くの鳥種に共通する重要な病気

##### 1) 肥満

飼鳥全般にみられる病気です。動きが鈍くなり、飛べなくなってしまう個体もいます。肥満は基礎疾患としても重要で、肝臓疾患、痛風、糖尿病など種々の病気を継発します。予防としては、規則正しい生活と栄養バランスを考えた餌にすべきです。猛禽類を除く全ての鳥種には青菜の給餌を忘れてはなりません。

##### 2) 卵塞

飼鳥全般にみられる病気です。大きな糞をして床にすることが多く、お腹が大きく膨れます。元気、食欲がなくなり、時に嘔吐や痙攣を起こして死亡することもあります。低温と栄養不足が主な原因です。ポレー粉やカトルボンなどカルシウムの給与は欠かさず、生理・生態に合った繁殖回数（小鳥の場合は年に1～2回）にさせることが大切です。過排卵のた

め栄養不足になることが決して少なくありません。

### 3) 感冒

全ての鳥種で罹患し、若鳥に多発する傾向があります。特にラブバードでは特徴的な症状を出します。一般的にはくしゃみ、咳、流涙、眼結膜の発赤・腫脹、鼻汁の排泄などがみられます。その他、異常呼吸音や呼吸速迫、声の異常といった症状も発現します。慢性化すると完治しにくいいため、早期治療が重要となります。

### 4) 毛引き(羽つつき)

オウム・インコ類の鳥種すべてが対象となる病気です。鳥自身が自分の羽毛をかじったり、抜いてしまったり、肉を食べてしまうこともあります。原因は様々ですが、慢性疾患や寄生虫感染、ホルモンのアンバランス、栄養障害などに起因することが多く、これらに精神的ストレスが重なっていることもあります。

## ② フィンチ類で重要な病気

### 1) 皮膚真菌症

トリコフィートンという真菌によって起こります。嘴の届かない頭頸部に丸い黄色の痂皮ができて、非常に痒がります。こまめに水浴や日光浴をさせてあげてください。

### 2) トリコモナス感染症

フィンチ類、オウム類、ハト、猛禽類に非常に多く発生し、若鳥では死亡率が高い病気です。トリコモナス原虫が原因で、くしゃみ、鼻汁、プチプチ音、口腔の粘りや汚れ、嘔吐、頭頸部の腫脹を起こします。同じ餌入れ・水入れなどから他の個体へうつります。不適切な給餌から起こりやすくなります。

## ③ カナリアで重要な病気

### 1) 肝臓疾患

カナリアは羽毛の色を美しくするために「色上げ剤」を給与することが多いようです。しかし、これを長期間与えつづけると肝臓疾患を起こします。爪や嘴が変形して伸びやすくなり、羽毛は失沢し、粗造となり、脚にはハバキが過剰となり、皮膚には色素が沈着します。「色上げ剤」を使用する時は、換羽期のみ短期間の使用とすべきでしょう。

## ④ キュウカンチョウで重要な病気

### 1) ヘモクロマトーシス

肝臓に鉄分が貯蔵する病気で、初期はくしゃみなどの風邪様の症状がみられますが、悪化すると開口呼吸、呼吸速迫となり、腹水が溜まって死亡します。キュウカンチョウをはじめとする特定の鳥種に発生する病気で、餌の中の過剰な鉄分が原因といわれています。また、遺伝的な要素が関連しているかもしれません。予防としては、ミルウォームなどの虫やフルーツ、野菜を毎日必ず給与し、できれば「低鉄分」を明記してある餌を給与することが望ましいでしょう。

## ⑤ セキセイインコで重要な病気

### 1) 脚弱

セキセイインコに多く見られます。給与飼料の栄養不足から起こります。特にビタミンの欠乏による「脚(かっ)気(け)」が多く、起立歩行ができなくなります。サシエの中には青菜を摺って入れるなど、必ずビタミン、ミネラルを添加してください。

### 2) カイセン症

嘴や目の周囲、脚などに粉をふいたような白い痂皮ができます。進行すると嘴が変形してしまします。トリヒゼンダニが原因で、同居鳥は程度の差はありますが感染していることが多いです。青菜(ビタミンA)不足や免疫力低下が関与しています。

## ⑥ ラブバード(ボタンインコ、コザクラインコなど)で重要な病気

### 1) 感冒

全ての鳥種で罹患しますが、特にラブバードでは特徴的な症状を出します。くしゃみ、鼻

汁、耳漏、開口呼吸、呼吸速迫といった症状や逆にそうした症状を伴わずに眼の発赤、腫脹、流涙、閉眼のみを示すことも少なくありません。若鳥の場合は死亡率が高い病気でもあります。膨羽しているようであればすぐに保温します。日頃から青菜（ビタミンA）の給与やバランスのとれた食餌が大切です。

⑦ オカメインコで重要な病気

1) そ嚢炎

すべての鳥種に罹患しますが、特にオカメインコの若鳥では、原虫（トリコモナス）および細菌（らせん菌）によるそ嚢炎が多くみられます。症状としては、嘔吐や食滞を示します。予防には適切な飼育管理と衛生が重要です。

2) カンジダ症

カンジダ酵母の感染による消化管の病気で、すべての鳥種にみられます。一般に、嘔吐や下痢がみられますが、特にオカメインコでは口腔内の粘りや口角の汚れが顕著に現れます。治療には、抗真菌剤の投与が行われますが、ビタミンの補給や飼育管理の改善も重要です。

⑧ 大型のオウム・インコ類で重要な病気

1) サーコウイルス感染症（PBF）

すべてのオウム・インコ類が対象となる病気です。全身の羽毛が抜けて嘴や爪が長く伸びます。サーコウイルスの感染によって発症しますが、特に大型のオウム類では発症すると治らない病気です。健康診断の際、このウイルス遺伝子が検出された場合、発症する前にすぐに治療を行うと、発症が防げることがあります。脂粉や糞便によって他の鳥へ感染しますので、この病気の鳥が見つかったら早期の隔離が必要となります。

⑨ ハトで重要な病気

1) ニューカッスル病（ND）

トリパラミクソウイルス1型（鶏のNDウイルスと同一抗原性を有する）の感染によって起こる重要な疾病で、下痢と神経症状が主体となります。ハトの場合は、腸管の出血や呼吸器症状に乏しく、下痢と神経症状が主体となります。本病の予防にはNDのワクチン投与が効果的です。

2) 封入体肝炎（IBH）

肝臓に核内封入体を形成することを特徴とする感染症で、トリアデノウイルス（AAV）によるものとハトヘルペスウイルスによるものがあります。AAVによるIBHは下痢、消瘦、嘔吐、急死などの症状を示します。効果的な予防法や治療法はなく、隔離と淘汰によって発生の拡散を防止します。

3) サルモネラ症

サルモネラ・チフィムリウムの感染によるものが多く、下痢、消瘦、翼や脚の麻痺、産卵障害などを示して死亡します。保菌ハトの摘発・淘汰による清浄化に努めることが唯一の予防法です。治療には感受性のある抗生物質が用いられます。

4) その他

真菌症やトリコモナス感染症が散発的に発生します。

⑩ ニワトリで重要な病気

1) ニューカッスル病（ND）

NDウイルスの感染によって起こる伝染性の強い病気です。強毒ウイルスが流行すると高致死率による甚大な被害をもたらすため、法定伝染病に指定されている重要な病気です。ワクチンが広く普及しており、発生数は極めて少ないのですが、未だワクチンの不使用や不適切なワクチンの使用による散発的な発生が問題となっています。

2) 鳥インフルエンザ（AI）

A型インフルエンザウイルスの感染によって起こる局所または全身性の病気で、法定伝染病または届出伝染病に指定されています。不顕性感染するものから急性経過で死亡する高病

原性鳥インフルエンザ（法定伝染病）まで病態は様々です。予防にはワクチンが有効ですが、我が国では実用化されていません。

3) マレック病 (MD)

ヘルペスウイルスに属するMDウイルスの経気道感染によって起こるTリンパ球性の白血病で、届出伝染病に指定されています。ウイルスは皮膚のフケによって空気伝播し、初生雛が最も高い感受性を示します。予防には生ワクチンが使われていますが、ワクチンはウイルス感染までは防止しませんので、通常の衛生管理が重要です。

4) 伝染性ファブリキウス嚢病 (IBD)

IBDウイルスの感染によって起こる急性伝染病で、届出伝染病に指定されています。この病気はリンパ組織の壊死と炎症反応を特徴とするため、著しい免疫抑制を引き起こします。したがって、細菌などの二次感染による症状の増悪が問題となります。予防は適切な時期でのワクチン接種および消毒による汚染の低減が重要となります。

5) マイコプラズマ病

鶏のマイコプラズマ病は2種類のマイコプラズマによる慢性呼吸器病で、まれに関節炎も見られます。通常は不顕性感染ですが、飼育環境の悪化や他の微生物の複合感染により発症します。予防には、MG（マイコプラズマ・ガリセプチカム）ワクチンの生または不活化ワクチンが使われています。

6) サルモネラ症

サルモネラ菌感染による人と動物の共通感染症であり、特定の血清型では法定伝染病または届出伝染病に指定されています。本来は幼雛の敗血性疾病で、死亡の多くは2週齢頃までにみられ、一般に保菌鶏は無症状で経過することが多いようです。また、食中毒の原因菌としても重要です。予防法としては、近年、ワクチンおよび競合排除法が実用化されてきています。

7) コクシジウム症

アイメリア属の原虫感染によって起こる病気で、下痢、食欲不振・廃絶、体重減少、貧血、産卵低下などの症状を呈し、血便がみられるものでは高死亡率を示します。予防および治療には、サルファ剤や抗原虫剤の投与などが行われます。近年では、予防用ワクチンも実用化されてきています。

8) その他

上記の病気のほかにも、伝染性気管支炎 (IB)、伝染性喉頭気管炎 (ILT)、鶏痘 (FP) などのウイルス病、家きんコレラ、伝染性コリーザ、大腸菌症などの細菌病、アスペルギルス症などの真菌症、ロイコチトゾーン症、ヒストモナス症などの原虫病および鶏回虫、鶏毛体虫、鶏盲腸虫、気管開嘴虫、鶏糞線虫などの内部寄生虫病があります。また、栄養・代謝障害で起こる痛風、脂肪肝、骨障害などもみられます。

⑪ ウズラで重要な病気

1) ニューカッスル病 (ND)

NDウイルスの感染によって起こり、元気消失、緑便、産卵低下、無斑卵の産出を主徴とし、脚麻痺などの神経症状を示すものもみられます。予防には生ワクチンが用いられます。

2) マレック病 (MD)

MDウイルスの感染によって起こり、6～7ヵ月齢以降に多発します。神経症状はみられず、食欲低下、元気消失および消瘦を示します。予防には、14～35日齢で生ワクチンを接種することが有効です。

3) サルモネラ症

サルモネラ・チフィリウムの感染によるものが多く、水様便や白色下痢便を排泄して死亡します。発生予防や治療には、感受性を示す抗生物質が用いられます。養(よう)鶏(じゅん)場(じょう)における浄化対策が重要です。

- 4) 潰瘍性腸炎（ウズラ病）  
 クロストリジウム・コリナムの感染によって起こり、発病したウズラは元気・食欲がなくなり、羽毛を逆立て、目を閉じて佇立し、水様の下痢をします。腸では潰瘍が形成され、しばしば穿孔性の腹膜炎を起こします。治療には感受性を示す抗生物質の投与が有効です。
- 5) その他  
 アスペルギルス症による肺炎、急性型または慢性型のコクシジウム症、産卵低下を起こす条虫症が発生します。
- ⑫ アヒル、ガチョウで重要な病気
- 1) アヒルウイルス性肝炎  
 アヒル肝炎ウイルスの感染によって起こり、伝染性の高いアヒルの感染症として知られています。5週齢未満の雛で発生がみられ、主に肝臓が冒される致死性の病気です。外国では予防にワクチンが用いられていますが、国内ではワクチンは使われていません。
- 2) アヒルウイルス性腸炎  
 アヒル腸炎ウイルスによるアヒルとガチョウの急性感染症で、アヒルペストと呼ばれています。症状としては、食欲・元気の消失、喉の渴き、運動失調、羽毛の逆立ち、鼻汁、水様性下痢がみられ、若齢雛では高い致死率を示します。
- 3) ガチョウパルボウイルス感染症  
 ガチョウパルボウイルスによるガチョウの雛の急性感染症で、アヒルにはみられません。2週齢以下の感染雛では、時に食欲廃絶や虚脱がみられますが、ほとんどが突然死します（死亡率は70～100%）。我が国ではワクチンは実用化されていませんので、本症の予防としては雛を4～5週齢まで厳密に隔離飼育することが大切です。
- 4) モラクセラ感染症  
 モラクセラ・アナチペスチファーの感染によって主としてアヒルの雛に発生する敗血症性疾患です。症状としては、元気消失、流涙、鼻汁、咳、くしゃみ、緑色下痢、頭頸部の振戦、昏睡がみられ、気嚢炎、心膜炎、肝被膜炎などが特徴的な病変です。予防には不活化ワクチンが有効ですが、我が国では実用化されていません。治療には抗生物質およびサルファ剤が用いられています。
- ⑬ 猛禽類で重要な病気
- 1) アスペルギルス症  
 一般的には呼吸器に感染する真菌で、死に至ることもある病気です。このカビの胞子は至る所に存在しており、これを吸入することによって感染しますが、ストレスなどにより免疫力が低下している動物が発症します。呼吸困難、声の変化、不活発などの症状がみられます。予防には、飼育施設を清潔に保つ、温度や湿度を適正に保つなどの快適な環境整備が必要です。
- 2) 趾(し)瘤(りゅう)症(しょう)  
 猛禽のほか、水鳥にも多い病気です。足の裏が変形したり、炎症を起こして腫れたり化膿したりします。時には骨にまで炎症が及び、死に至ることもあります。予防としては、ビタミンの補給や適正なサイズの止まり木に取り替えるなど、適切な飼育管理が重要です。
- 3) その他  
 トリコモナスなどの原虫や線虫、条虫、吸虫などの内部寄生虫が多くみられます。その他、ヘルペスウイルスやポックスウイルスなどによるウイルス病、パストレラやマイコバクテリウムなどの細菌病もみられます。輸入鳥が多いため、日本にはいない寄生虫も問題となります。
- ⑭ ワクチンについて  
 感染症の予防のために、鶏用のワクチンは野外で広く応用されています。ワクチンのプログラムは個々の飼育場所での汚染状況、衛生環境、立地条件、周囲の流行状況などによって異なる

りますので、それぞれに適したプログラムを組み立てる必要があります。各種疾病の予防に用いられる鶏用ワクチンを、表5に示しましたのでご参照下さい。

表5: ワクチンで予防できる鶏疾病

病原体	疾病名	ワクチンの種類
ウイルス	ニューカッスル病 (ND)	生・不活化
	鶏伝染性気管支炎 (IB)	生・不活化
	鶏伝染性喉頭気管炎 (ILT)	生
	鶏脳脊髄炎 (AE)	生
	マレック病 (MD)	生
	伝染性ファブリキウス嚢病 (IBD)	生・不活化
	トリレオウイルス感染症 (AR)	生・不活化
	鶏痘 (FP)	生
	産卵低下症候群・1976 (EDS・76)	不活化
	鶏貧血ウイルス感染症 (CA)	生
	頭部腫脹症候群 (TRT)	生・不活化
マイコプラズマ	マイコプラズマ病 (MG)	生・不活化
細菌	鶏伝染性コリーザ (IC)	不活化
	大腸菌症	不活化
	サルモネラ症 (SE)	不活化
原虫	コクシジウム症	生
	ロイコチトゾーン症	不活化

## (2) 衛生

哺乳類と同様に鳥かごや餌入れ・水入れ等の清掃を励行します。一般に、消毒薬は哺乳類で用いるものと同様です（哺乳類の冊子を参照）。鳥類は気嚢を有しているため、「吸入刺激」には非常に敏感です。できれば、刺激の少ない薬剤を選択したほうがよいでしょう。鳥かごは金属性のものが熱湯消毒に対して耐久性も高く、有用だと思われれます。キュウカンチョウ、すり餌鳥に関しては、傷みやすい餌が主食となるので、季節によっては1日に数回取り替える必要があります。また、穀類主体の鳥種でも、古い餌へ新しい餌の追加は不衛生となりますので避けましょう。

## (3) 栄養

各鳥種により、栄養の必要要求量は異なります。一般に哺乳類と比較すると、鳥類はビタミンA欠乏やカルシウム不足による代謝障害（痛風、卵塞など）が多いです。ちなみに、鳥類は哺乳類と比較してカルシウムの要求量は5倍ともいわれています。また、室内飼育によるため日光不足やビタミンD<sub>3</sub>不足も多くみられます。フィンチ、カナリア、オウム・インコ類、キュウカンチョウに関しては、近年、「総合栄養食」としてのペレットが数多く販売されているので利用してみるのもよいでしょう。また、それぞれのライフスタイルに伴って変化する栄養要求に合わせたバランスのとれた食餌が必要です。成長期、換羽期、繁殖期では、通常の2倍の蛋白量が必要とされ、その他、気候、年齢、運動量なども考慮する必要があります。哺乳類と比較して、1日中飽食（餌の入れ放し）にさせることが多いので、バランスのとれた食餌（できるだけ多くの種類の餌）をムラなく食べさせることが大切です。フィンチ、カナリア、オウ

ム・インコ類、ハト、キジ目に関しては1～2日で食べ切る量にして、餌の追加や総入れ替えは栄養のアンバランスを引き起こしますので避けるべきです。但し、この場合特に、身体の小さい鳥は体力がないので、いつも餌があることは必ず確認してください。特定の栄養素の過剰あるいは欠乏は、多くの疾病を引き起こす要因となり、このことによって死に至ることも決して少なくありません。猛禽類、キュウカンチョウ、すり餌鳥を除くほとんどの鳥種では、穀類を主食とし、必ずカルシウムの補給としてボレー粉やカトルボーン、ビタミンの補給として青菜（大型のオウム・インコ類では果物も可）の給与を行いましょう。キュウカンチョウは低鉄分の餌を主食とし、毎日数種以上の果物や昆虫も与えましょう。すり餌鳥には、各鳥種にあった配合のすり餌に青菜を摺って与えましょう。また、鳥種によっては、昆虫やフルーツの給与も必要です。猛禽類はできるだけマウス、ラット、ヒヨコなどの給餌を心がけ、さらにカルシウム剤やビタミン剤の添加も必要です。

#### (4) 事故防止

小鳥たちは、繁殖を必要とした時のみに巣を入れましょう。1年中巣を入れておくと、不衛生になったり、ホルモンバランスが悪くなったりします。また、特にフィンチやカナリアは爪が伸びすぎてつぼ巣に指や爪を引っ掛ける事故も多く見られます。小型鳥からキュウカンチョウくらいの大サイズの鳥では羽を切らないようにしましょう。羽が切られていると、危険が迫った時にうまく逃げられません。特に、手乗り鳥として室内に出している時などに、「踏んだ、挟んだ」という事故が後を絶ちません。また、室内に放鳥する時には必ず窓が閉まっていること、台所等に危ないものを置いていないことを確認してください。外へ逃げてしまったり、油の入った天ぷらなべに落ちてしまったりすることがあります。万一、外へ逃げてしまった時にも、羽が切られているとうまく飛んでいけずに、猫やカラスに襲われてしまう例があります。オウム・インコ類では鳥自身が扉を開けて逃げることもあるので洗濯バサミなどで逃亡を防ぐ工夫も必要です。特に大型オウム・インコ類では、鳥かごを食い破ってしまうこともあるので、しっかりとした大型のステンレス製の鳥かご（亜鉛メッキなどの塗装を施していないもの）を選び、扉にはナスカンを使用します。しかし、ナスカンでも開ける個体がいるので、南京錠が必要な場合もあります。

#### (5) 人への被害

大型のオウム・インコ類は家族のヒトに優先順位をつけて、自分より弱いものに対して威嚇したり攻撃したりすることがあります。必要に応じて羽を切るなどして行動制限を行いましょう。また、いつでもヒトの視線より低い位置で飼育することが大切です。子供が不用意に手を出すと大きな事故につながる恐れがありますので、近づく時には優しく声を掛け、鳥の反応を見ながら接するように心がけましょう。

## 5. 人と動物の共通感染症

### (1) 人と動物の共通感染症とは

人と動物との共通の病気、動物から移る病気を人畜共通感染症、動物由来感染症などといい、世界には200種類ほどの病気があるといわれています。このうち鳥から感染するといわれているものは表6のとおりです。ほかにも海外には日本ではまだ発生がない病気が多くありますから、新しい個体を導入する場合や、輸入して間もないものには注意を払う必要があります。

動物を飼う人が増えたことと飼育環境の変化などにより、日本でも人と動物の共通感染症の発生例が増えています。しかし、これらの病気を知り、適切な管理と予防をすれば必要以上に恐れることはありません。人と動物の共通感染症についての知識を深めて、動物との生活を健康で楽しいものにしたいたいです。

### (2) 飼育環境の管理

鳥かごやその周辺の掃除をこまめに行って、いつも清潔にしておきましょう。鳥かご、餌入

れなどの飼育器具は、定期的に日光や消毒薬で消毒するのが理想的です。

餌や水は常に新鮮なものを与えるようにしてください。

室内で飼育している場合は、鳥かごだけでなく室内の清掃と、換気を十分に行ってください。

(3) 動物の健康管理

動物は人と動物の共通感染症にかかっている、はっきりとした症状を示さないことがあります。早期発見のために、飼っている動物に普段と違った様子がないかなどを常にチェックしておきましょう。

特に雛や飼い始めたばかりの鳥は念入りに観察し、異常を見つけたときは早めに獣医師に相談しましょう。

(4) 動物に接するときの注意

口移しで餌を与えるなど、濃厚な接触は避けましょう。鳥や鳥かごを台所や食卓に近づけることもやめてください。ある程度のけじめを持って接することが大切です。

鳥にさわるとき、糞の始末などの世話をする前後には、必ず石けんで手を洗いましょう。また、多数の鳥を収容している飼育室や、禽舎の中などで作業をする場合は、作業服に着替え、マスク、防護ゴーグルなどを着けることも必要です。作業後の手洗いとうがいを習慣にしてください。

自分の体の具合が悪いときは、なるべく動物を取り扱わないようにしましょう。

また、病院などで診療を受ける際には、鳥を飼っていることを医師に伝えてください。

(5) 主な人と動物の共通感染症（四類感染症）

① オウム病

比較的多く発生している病気です。

病鳥や保菌鳥の糞中のクラミジアを吸い込むことで感染します。また、口移しでえさを与えたり、かまれたりして感染する場合があります。

発病した鳥は元気がなく、さえずりもなくなり、目を閉じて羽を逆立ててふくらんでいます。また、下痢が見られます（お尻がよごれる）。雛や若鳥で症状が重く、死亡することが多いのですが、成鳥では無症状のことがあります。

人が感染すると高熱、頑固な咳など、風邪に似た症状がみられ、重症の場合は肺炎をおこします。

買ってきた小鳥からオウム病が感染し、飼い主が死亡したとして、ペットショップが訴えられた事例があります。

② 鳥インフルエンザ

鳥インフルエンザはウイルスの感染による家禽類を含む鳥類の疾病で、低死亡率で感染すると呼吸器症状、下痢、産卵の低下をもたらす低病原性（弱毒型）タイプと、「家禽ペスト」と呼ばれ、沈鬱状態、神経症状を示し、ほとんどが死に至る高病原性（強毒型）タイプがあります。

鳥インフルエンザが人に感染した場合、重症例になることが多いといわれています。

③ ウエストナイル熱

ウイルスによる鳥と人に共通の感染症で、主に蚊を介して人に感染し、発熱や脳炎をおこします。我が国ではまだ感染例はありませんが、ヨーロッパやアメリカなどでは1990年代中頃から発生しています。

鳥類では普通は症状を示さず、鳩、鶏、カラスなどでは脳炎、死亡、または長期間のウイルスの持続感染がおこるといわれています。

人では感染例の約80%は無症状で、発症した場合でも多くは発熱、頭痛などの風邪に似た症状を示し1週間程度で回復します。麻痺、痙攣などの髄膜炎・脳炎症状をおこす重症者は感染者の約1%で、高齢者に多いようです。

表6: 鳥類に関係する主な人と動物の共通感染症

病名	病原体	主な感染経路	動物の主な症状	人の主な症状	その他
オウム病	クラミジア	吸入(糞便、だ液)	下痢、元気消失。 ヒナや若鳥で重症、成鳥では無症状が多い。	インフルエンザ様症状 発熱、咳、倦怠感、筋肉痛、頭痛、関節痛 重症例では呼吸困難、意識障害。	第4類感染症
ニューカッスル病	ウィルス	飛沫への接触	食欲廃絶、元気消失、濃緑色下痢、呼吸器および神経症状。	結膜炎、インフルエンザ様症状、耳下腺炎。	
鳥インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザ)	ウィルス	吸入(咳など) 経口(手指を介して) 不明の点が多い	沈うつ、とさか・顔面の腫れ、呼吸器症状、下痢、食欲減退。	急な発熱、倦怠感、頭痛、関節痛、のどの痛み、咳など。 高齢者は肺炎に移行することがある。	第4類感染症
サルモネラ症	細菌	経口(飲食物を介し)	無症状が多い。	発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸	食中毒原因
非定型抗酸菌症	細菌	経口 不明の点が多い	皮膚の肉芽腫様病変、体重減少、肝腫大。	免疫が低下していると肺炎症状、時に皮膚病変。	
クリプトコッカス症	真菌	吸入(糞便)	無症状。	免疫が低下していると症状が出ることがある。発熱(軽度)、咳、胸痛、頭痛、昏睡、記憶障害(クリプトコッカス髄膜炎)。	
カンピロバクター	細菌	経口(飲食物を介し)	無症状が多い。	発熱、粘血便を伴う腸炎。	食中毒原因
ウエストナイル熱	ウィルス	蚊の媒介	通常は症状を示さない。 カラス、カケス、サギ類で感受性高。小型鳥類は感受性低。	発熱、頭痛、筋肉痛、時に消化器症状、倦怠感。	第4類感染症
<p>世界にはこのほかにも、鳥類が関係するといわれている人と動物との共通感染症として、Q熱、デング熱、ライム病、西部ウマ脳炎、野兔病、クリミアコンゴ出血熱、ヒストプラズマ症、ムレーバレー脳炎、シンドビス脳炎などがあります。</p>					

### III. 種類ごとの個別事項

#### 1. フィンチ

##### (1) 分類、品種

フィンチとは、スズメ目の60科中のホオジロ科、アトリ科、カエデチョウ科、ハタオリドリ科の4科の鳥を表す総称です。鳥類は同じ科に属する仲間であっても、種によって色々なものを餌とし、ホオジロ科の鳥の中には飼い鳥としての分類上、食性の違いから通常は軟食鳥として扱われるフウキンチョウ類、ミツドリ類も含まれます。したがって飼い鳥におけるフィンチの範囲は食性による違いも考慮して「前記の4科の内、粒餌（播餌）を主食として飼育できるスズメ型の鳥」ということとなります。そのうちの約50種程度が一般的な飼い鳥として知られ販売されています。ジュウシマツ・ブンチョウなどは飼育下で歴代繁殖を繰り返され飼い鳥化の進んだ種類として、基本さえ正しく守れば初心者でも飼い易い入門鳥として人気がありますが、今でも野生のものを捕獲して販売、飼育されている種類も多くあります。なお、アトリ科のカナリアはフィンチの範囲に含まれる鳥ですが、飼育の歴史が長く、多くの品種もあることから通常、フィンチとは分けて個別に取り扱います。

##### (2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

###### ① 施設、環境

飼育には鳥かごや庭箱を使う方法と禽舎と呼ばれる大型の小鳥小屋を利用する方法がありますが、鑑賞目的で飼育するには金属製の鳥かごを用います。鳥かごの大きさは小型フィンチのつがい35（間口）×35（奥行）×40（高さ）cm（以下同じ）、大型種のつがい45×45×50cmを標準に、少なくとも羽を広げて止まり木から止まり木へと飛び移ることができる空間が必要です。庭箱は前面を除く面が木製で小鳥を落ち着かせることができるので、繁殖の時や輸入されたばかりで飼育される環境になじまないとき、神経質な鳥を飼育するのにむいています。鳥かごや庭箱は人の目と同じくらいの高さで安定のよい場所におきましょう。

禽舎飼育の場合は植木や草などを利用して自然に近い環境を再現して飼育を楽しめます。飼育の歴史が長く、飼い鳥化の進んだ一部の種類を除くフィンチ類は鳥かごでの飼育は難しく、ましてや繁殖を試みる場合は禽舎飼育でなければ困難です。但し1×2×1m程度の広いスペースが確保されなければなりません。

###### ② 器具、機材

止まり木は、鳥が生活のほとんどの時間を過ごす重要な場所です。木製のものが推奨され、鳥が止まった状態で爪の先端が止まり木に触れる程度が標準的な太さです。設置は鳥かごの奥と手前に段差をつけて鳥の尾羽が鳥かごや餌入れに当たらないように十分な間隔を取って取り付けます。止まり木を交差させて設置すると必要以上に糞で汚れるので、平行に取り付けるのが一般的です。自然木を利用することもよいことです。熱湯消毒をした後、よく乾燥させて使用してください。

餌入れ、水入れは鳥かごに付属の物がかまいません。副餌用にかごにかけられる小型の容器と菜さしを別に用意します。フィンチの多くは、水浴びを好みます。飲み水とは別に水浴び用の容器が必要です。陶器製の小判型の水入れが安定性に優れ、洗浄も容易なのでよく利用されます。跳ね水防止には専用のカバーを利用するのも便利です。

巣は通常、ツボ巣と呼ばれるワラ製の物や木製巣箱などで、その鳥の習性や体の大きさに合った巣を選びます。カエデチョウ科の約半数は夜間巣に入って寝る習性をもちますが、それ以外の大部分のフィンチは、繁殖以外の目的に巣を必要としません。雑菌や害虫の発生のほか、ホルモンバランスの異常の原因にもなるので必要とき以外は取り付けないようにします。なお、繁殖用の巣は、雛が育った状態を想定して大きめの物を設置しましょう。巣材としてワラ、乾草、シュロ、コケなども与えます。禽舎では十分に巣材を与えれば自分で営

巢する鳥が多くいます。

### (3) 飼い方のポイントと注意点

#### ① 飼料

フィンチ類の飼料も、他の動物と同じく栄養的に蛋白質、炭水化物、脂質、ビタミン、ミネラルなどのバランスのよい餌が基本です。また、鳥種、季節的要因、繁殖期、換羽期、成長段階などを考慮して主餌に混合する穀物の種類や割合の工夫が必要です。フィンチ用として一般に市販されているのは、ヒエ・アワ・キビ・カナリアシードの4種の穀物を混合したもの（以下4種混合）です。よく比率は順に6：2：1：1がよいといわれますが、ヒエが高価なこととカナリアシードを好む鳥が多いため、実際にはこの割合で販売されている餌は少ないようです。特にキビの類似穀物を増量している特売用の餌には注意してください。大粒で見た目に艶があり、きれいな餌は要注意です。無意味な着色をしている商品などは論外です。このほかにナタネ、エゴマ、ニガーシードなどの脂肪餌、玄米や未熟米、エンバク（オートミール）などを与えることもあります。冬季や育雛期間、換羽後期には高栄養を必要としますので脂肪餌や動物性の餌を少量加えます。ムキ餌は雑菌やカビが付きやすく、栄養分も損なわれやすいので、特別な事情のある場合を除いて殻付のものが推奨されます。またフィンチ類の嘴は穀物の殻を剥いて採食する形状に進化しており、鳥の習性上、ストレスの解消のためにも殻付の穀物が適正な飼料形状といえます。主餌の他に補助飼料としてボレー粉や青菜、ビタミンやミネラルなどのサプリメントを与えます。ボレー粉はグリットとして筋胃内で小鳥が食べた餌を細かくすりつぶす働きをするとともに、カルシウムの供給源になります。青菜はビタミンの供給源として小松菜、キャベツ、アブラナなどを与えます。小鳥専用のビタミン剤が販売されていますので利用するのもよいでしょう。さらに近頃では鳥類の栄養学的研究が進み、微量元素（ミネラル）などの栄養素の重要性から、各種サプリメントが給餌されるようになってきました。また、最近では各種フィンチ、カナリア用のペレットフードが市販されるようになりました。ブンチョウやカナリア等飼い鳥化が進んだ種類の場合、飼料の選択肢の一つとして利用してみるのもよいかもしれません。繁殖期用の特殊飼料として、アワ玉、卵黄、昆虫などが利用されます。これらの飼料は、動物性蛋白質の供給を目的に与えますが、発情期や育雛、健康を害した時などに限って給餌する飼料であり、常に与えることは動物性蛋白質の過剰摂取を招き健康を害することがあるので注意が必要です。なお、市販のアワ玉は保存上の問題などから大半の商品は卵の割合が少なく、発情促進目的に使用する場合、ムキアワ180～360ccにつき卵黄1個の割合で自作したほうが効果を望めます。飲み水は常に新鮮なものを与えます。フィンチ類の鳥は水浴びを好む種類が多いので、水を汚しがちです。少なくとも1日に2回は取り替えるようにします。

自然は鳥たちの食べ物の宝庫です。季節の草木の若葉や種子、虫の幼虫、発芽を開始した穀物類など鳥が必要とするときに必要なものを自然は準備しています。その季節に何を与えたらよいかを考えるとときの参考にしてください。

#### ② 日常管理

フィンチやインコ類の1日の生活は日の出とともに始まり、もっとも活発に活動するのは早朝の時間帯です。したがって朝できるだけ早い時間に水を交換し、主餌や副餌、その他の点検、補給を済ませます。このときに小鳥の状態を観察する習慣を身に付けておくようにし、餌や水の摂取程度、動作、便の状態などこまめにチェックします。普段と何か違うような気がした時は、少し様子を見てみようなどと考えずに、早めに獣医師の診察を受けるようにしましょう。フィンチ類など弱い動物は自分の具合の悪さをなるべく隠そうとします。具体的な症状が見られたときには既に手遅れになっていることが多いのです。

かごの掃除は汚れの状態によって行います。あまり頻度が高くなると鳥が落ち着けなくなってしまう。特に営巣期間中は最小限にとどめます。日の入りとともに鳥の1日は終了し、寝につきます。このサイクルは非常に大切に、不自然な人工灯の下での飼育、特に1年

を通した日照時間のリズムを無視した飼育はホルモンに影響を与え、その結果、健康に影響を及ぼします。手乗りの鳥であっても触れ合う時間は日中に限り、夕方暗くなれば静かに寝かせてやる習慣をつけましょう。鳥かごの設置場所についてもこのことをよく考えて、居間や台所のようにいつまでも人のいる場所のそばには置かないようにします。店頭においても同様で、せめて小鳥の生体を展示している部分だけでも、日没後は消灯し、静かな環境においてやるのが望まれます。1日と1年の日照サイクルを適正に守ってやれば、小鳥は比較的丈夫な生き物です。

### ③ 季節ごとの管理

#### 1) 春

もっとも気候のよい時期ではありますが、昼夜の気温差が激しい日もあり、輸入後間もない鳥や若鳥では温度変化が大きくなりすぎないように注意が必要です。繁殖をはじめると場合には、ツボ巣や巣箱を取り付け、アワ玉などの発情飼料を準備します。梅雨のころには飼料のカビや腐敗、ワクモなどの害虫の発生などに注意が必要で、器具類の消毒を適時行います。

#### 2) 夏

羽毛が抜け替わる(換羽)季節に入ります。抜け始めの頃はそっとしておき、休養をとらせます。新しく生えはじめる頃から十分なたんぱく質やビタミン・カルシウムの補給が必要です。繁殖は原則中止し、衛生上のことも考慮して巣は取り外します。高温多湿の日が続く、餌にカビや虫が発生し易いので、日光に当てよく乾燥させて与えるようにします。また真夏の直射日光の下での長時間の日光浴は危険です。室内でも密閉されていると思われぬ高温になることがあるので注意します。

#### 3) 秋

小鳥にとって一番安定した季節といえます。再度繁殖活動に入る種もあり、準備に取り掛かります。この時期は冬越しのための体力作りの季節でもあります。適度な日光浴と運動、ビタミン類の補給が必要です。晩秋になると1日の昼夜の気温差が大きくなるので注意します。初めて冬を迎える若鳥や温暖な地方原産の種には保温の準備をはじめます。

#### 4) 冬

飼い鳥化の進んだ種類では通常の室内飼育で越冬は十分可能です。熱帯地方原産の種、体力の乏しい小型品種、老鳥などには保温を行います。一部分を暖めるのではなく、室内、少なくとも鳥かご全体が暖まるように、エアコン、ヒヨコ電球による保温が効果的で、石油やガスストーブ、コタツの利用はガス中毒や酸素の欠乏、火災発生などの危険を伴うので避けたほうが賢明です。なお、乾燥が強い季節でもありますので適度な加湿も重要です。

### ④ 巣引き(繁殖)

飼い鳥を繁殖させることを巣引きと呼びます。フィンチの仲間で人の手元で繁殖できるように飼い鳥化されているのはカエデチヨウ科の一部の鳥に限られ、それ以外は禽舎での自然繁殖に頼らざるを得ないものがほとんどです。フィンチの代表としてジウシマツの繁殖を取り上げてみます。ジウシマツは夏の換羽期を除いて、条件を揃えればいつでも巣引きすることができます。繁殖の基本は、相性がよく年齢の近いオス・メスのつがいの選択から始まります。つがいが決まればツボ巣の入り口をやや上向きに付け、発情を促すためのアワ玉と、産卵に供えてビタミンやカルシウムなどを十分に与えます。発情餌を与え始めて2週間くらいで効果が観察でき、オスはメスに向かって胸を張り(さえず)ります。この頃に巣材になる柔らかいワラやシュロを与えるとつがいで巣材を巣に運び込み営巣します。鳥かごの移動や掃除は、巣引きの期間中は原則的に避けます。その後、メスが巣にこもるようになると産卵が始まります。1日1個、1週間くらいかけて平均5、6個産卵します。抱卵は2、3個産卵した時点から始まります。メスが朝夕の食餌以外にほとんど巣から出なくなったら、オスの再発情(追いざかり)を防ぐため、アワ玉の給餌は中止します。抱卵期間が終わる1、

2日前から育雛用の餌として再びアワ玉を与えます。孵化後4、5日でウブ毛がはえ始めるとオスも育雛に参加し、雛に餌をつがいで運ぶようになります。順調に生育した雛は21～25日で巣立ちし約3～4カ月のち換羽して4～6カ月を経て成鳥になります。また、冬季の巣引きは卵詰りや低温による雛の死亡などのリスクが大きいため避けるようにします。北半球では冬季に繁殖期を迎える鳥を巣引きする時や、そのためのジュウシマツ仮母（後述）には保温が必要です。

#### ※ジュウシマツによる仮母

ジュウシマツの子育て上手を利用して抱卵、育雛の下手な種類の鳥の卵を本来の親である種鳥に代わってジュウシマツに育てさせる方法です。産卵期を揃えるためと種鳥には毎日1卵ずつ産卵して1週間ほど休産した後にもたまたま産卵を繰り返すサイクルをもつものが多いことに対応するため、1つがいの種鳥に対して5つがいくらのジュウシマツを用意すると効率的な巣引きができます。方法は通常のジュウシマツの巣引きと同様にして、ジュウシマツの卵を種鳥の卵と取り替えるだけです。ただし、ジュウシマツの雛と似かよった姿勢で餌を求める種類であることと食性がジュウシマツと同じであることが必要条件です。

#### (4) 代表的なフィンチ

##### ① ジュウシマツ（十姉妹）

###### 1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属しますがジュウシマツは野生には存在しない鳥で、コシジロキンパラや近似種を交配して作り出された愛玩鳥です。野生の生活を知らないため鳥かごの中でもよく落ち着いていて、初めて鳥を飼う人にとって入門鳥として飼育が容易なフィンチの代表です。比較的地味な色合いですが黒・茶・白の3色を基本に様々な模様があります。また、羽毛の一部が変化した芸物と呼ばれる品種、ヨーロッパで改良されたヨーロッパジュウシマツなどがあります。

###### 2) 飼い方のポイントと注意点

雄は羽を膨らませて胸を張り（さえず）ります。雌は地鳴きと呼ばれる短い「ジュリジュリ」という鳴き声だけです。この鳴き方の違いによって雌雄の判別ができますが、成熟前の若鳥ではほとんど判別できません。主餌は4種混合で、ヒエ、アワを好みます。巣は中程度の大きさのツボ巣を使用し、繁殖時以外は不要です。子育てが非常にうまく他のフィンチの仮母として用います。

##### ② ブンチョウ（文鳥）

###### 1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、ジャワ島、バリ島など東南アジア近辺の原産ですが、現地では生息数がかなり減少しています。一般に販売されるのは飼育下で代々繁殖を重ねた飼い鳥です。羽色によって桜、パイド、白、シナモン、シルバー、アルビノ等があります。白ブンチョウは日本で江戸時代に出現し固定された品種です。

###### 2) 飼い方のポイントと注意点

雄の嘴は濃い赤色で大きく、上嘴が盛り上がっています。雌の嘴は上嘴がなだらかで雄に比べて細長く色も淡い赤色です。目のまわりの赤色も雄の方がはっきりして濃い色をしています。成鳥ならば雄はピーヨピヨピヨとよく（さえず）り、ピョンピョンはねるようなダンスをします。これらの違いで雌雄の判別をします。主餌は4種混合のほか未熟米（中米）、エンバク（オートミール）を与えます。発情餌にはアワ玉のほか、米に卵をまぶした卵米（らんまい）を使用します。巣は大型のツボ巣または木製の専用の巣箱が市販されています。繁殖のとき以外は不要です。

###### 3) 手乗り文鳥

鳥を飼育する楽しみ方の一つに、手乗り鳥があります。ブンチョウはその代表品種です。手乗り鳥にするには、孵化後2週間程度で雛を巣から取り出し、人の手で餌を与え

る(挿し餌)ことにより人に慣れさせます。よくなれた鳥は名前を呼べば飛んできたり、人を怖がることなく手のひらや肩に乗ったりするようになります。

雛は市販されていますので、よく観察して口を大きく開け、大きな声で餌をねだっている、お尻の部分が汚れていない個体を選びます。

《用意するもの》

わらフゴ(フongo)またはますかご、アワ玉、挿し餌用器具、青菜、ビタミン・カルシウムなどのサプリメント、ペットヒーター

《挿し餌のしかた》

アワ玉が浸る程度に熱湯を加え、小鳥の体温(42度)まで冷ましたものに、すりつぶした青菜と各種サプリメントを加えて餌を作ります。雛は上を向いて大きく口を開けて餌をねだりますので挿し餌器具で喉をつかないように注意しながら餌を与えます。餌が冷たくなると食べにくくなるので再度暖めます。食べた量は「そのう」のふくらみでわかります。早朝から夕方までのあいだ、3~4時間おきに1日4~5回与えます。一度暖めた餌は腐敗し易くなるので与えるたびに新しく作ります。朝1番と夕方最後の餌は特にしっかりと食べさせてください。成長とともに与える回数を減らし自分で粒餌を食べるように仕向けていきます。手乗り鳥を育てるにあたって保温は特に重要です。1~2羽での飼育は内部で30度程度の温度が保てるように、パネル型のペットヒーターの上にフゴを置いて暖めます。

③ キンカチョウ(錦華鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属するオーストラリア原産の初心者から愛好家まで幅広いファンがいる小鳥です。ジュウシマツよりやや小型で、飼い鳥化が進み、ノーマル、古代、白、シナモン、フォーン、ペンギンなど様々な羽色の種類が作り出されています。

2) 飼い方のポイントと注意点

ノーマルカラーの雄はオレンジ色の頬を特徴にして雌と判別できます。その他の羽色の場合も雄は雌より鮮やかな色で嘴の色も雄の方が鮮やかです。アワを好みますので、主餌は4種混合にアワを多めに増量します。巣は小型のツボ巣をもちますが、産卵後の自育能力には個体差があり、自育しないペアの抱卵・育雛にはジュウシマツ仮母を使います。

④ アフリカフィンチの仲間

1) 分類、品種

アフリカフィンチとは、アフリカ原産のフィンチの総称です。カエデチョウ科に属する種類が多く、小型で活発に活動します。代表的なアフリカフィンチとして、カエデチョウ、ハウコウチョウ、セイキチョウ、コウギョクチョウ、シマベニスズメなどがあります。いずれも体長約10cmでジュウシマツよりやや小型、平均寿命は4~5年です。

2) 飼い方のポイントと注意点

鑑賞を目的とする場合には金かごでも飼育出来ませんが、出来れば庭箱飼育が適切です。繁殖を試みるには鳥かごや庭箱飼育では困難で、成功させるためにはススキなどの草を植え込んだ禽舎で多数羽飼いを必要とします。主餌は4種混合餌にアワを増量します。また、発情と育雛期には小型の虫の幼虫や粟玉などの動物質の餌を与えることが重要なポイントになります。カエデチョウ、ハウコウチョウは比較的丈夫な鳥で入手後の疲れが取れれば、室内では保温の必要なく越冬します。通常飼育において特に気を使うことはありませんが、臆病なので静かな環境に置くようにしましょう。セイキチョウ、コウギョクチョウ、シマベニスズメなどについては、輸入後の養生と最初の越冬に注意が必要で、これを乗り越えれば丈夫にすごします。アフリカフィンチで販売されているのはすべて野生を捕獲したものです。

⑤ キンランチョウ（金蘭鳥）

1) 分類、品種

スズメ目ハタオリドリ科に属します。アフリカ大陸に広く分布しているため、地域により色合いの異なる亜種が多くあります。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄は普段は雌と同じような色合いで、背部の斑紋の濃さで判別しますが、繁殖期になると頭部から胸部にかけて鮮やかなオレンジ色になります。雄は抱卵から育雛までを雌にまかせて、次の雌と繁殖に移るため、1羽の雄に複数の雌が必要であり、1つがいただけの飼育では繁殖を期待できません。主餌は4種混合を基本に、カナリアシードを好むので増量します。冬季にはニガーシード、虫類を少量与えます。禽舎内によく乾燥させたワラ、牧草を入れておけば雄が巣作りをします。販売されているのは野生を捕獲したものです。

⑥ ベニスズメ（紅雀）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、インド、セイロンから東アジアにかけて広く分布する鳴き声の美しいフィンチです。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄の生殖羽は翼と尾の暗褐色を除いて全身が真っ赤になり、胸や腹部に鮮やかな白点が出ます。国内でのかご飼育では換羽が困難なようで、年々黒ずんでしまいます。通常の主餌は4種混合でもよいのですがアワ以外ほとんど食べないので、アワをかなり多めに混合するとよいでしょう。かご飼育での繁殖は困難で、巣引きから育雛期には小型の昆虫などの生餌や強いすり餌を必要とします。販売されているのは野生を捕獲したものです。近年国内で、逃げ出した紅雀が河川敷などで自然繁殖しているとの報告があります。

⑦ ナンヨウセイコウチョウ（南洋青紅鳥）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属します。ニューギニアを中心にセレベス、カロリン諸島、ソロモン諸島、北東オーストラリアに広く分布します。緑色の体に頭部の艶やかな濃い青色が特徴です。

2) 飼い方のポイントと注意点

雌雄同色ですがメスの顔の青色がやや暗く範囲も狭いことで判別します。神経質な小鳥で庭箱飼育するのが一般的です。身を隠すために天井から針葉樹の枝を吊るしてやると落ち着くようです。繁殖は庭箱でよく飼いこめば産卵しますが自育はまれで、仮母ジュウシマツに抱かせます。禽舎飼育で適当な環境を与えてやればよく増えます。近似種のヒノマルチョウ（日の丸鳥）はニューカレドニア島の固有種で鮮緑色の体で、頭部、顔、胸にかけてと尾羽が赤色です。サイズや飼い方は同じです。主餌は4種混合で、カナリアシードを若干多くします。未熟米もあたえます。販売されているのは、主にヨーロッパで繁殖されたものです。越冬には保温が必要です。

⑧ ヘキチョウ（碧鳥）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、マレー、スマトラ、ジャワに分布しています。

2) 飼い方のポイントと注意点

頭部から胸にかけて白く、他は茶褐色。雌雄同色で判別は困難です。見た目は地味ですが、丈夫な鳥で飼い易く、室内では越冬も容易にします。主餌は4種混合、玄米や未熟米もよく食べます。鳥かご飼育では繁殖は望めません。植え込みを伴った大型の禽舎が必要です。中近東からアジアにかけて分布するギンパラ、アミメチョウ、キンパラ、

コシジロキンパラなどもほぼ同様です。いずれも販売されているのは野生捕獲のもので  
す。

## 2. カナリア

### (1) 分類、品種

スズメ目アトリ科カナリア属カナリアという野生種を祖先にして、鑑賞鳥として長い歴史の中で作出された飼い鳥であり、①鳴き声②姿態③羽彩④色彩の4分野の鑑賞をそれぞれ目的として改良され、多くの品種が作られています。ジュウシマツと同様かご以外の生活を知らない  
ので、かご内で落ち着いて生活し、人を恐れることも少なく飼育しやすい種類の鳥です。国内の繁殖家のもとで繁殖されたカナリアには、産まれた年と通し番号の入ったクローズドリングが装着されています。

#### ① ローラカナリア

鳴き声を鑑賞するための品種で、鳴き声を繰り返し転がすように低く長く(さえず)りをします。歌の訓練は、若鳥に歌の上手い鳥の(さえず)りを聞かせてマスターさせます。(さえず)りだけを楽しむ場合は、雄を2羽別のかごに飼い、鳴き声を競い合わせます。

#### ② スコッチファンシーカナリア

姿態(スタイル)を楽しむ品種で、細カナリアの基礎種で、体が細く、静止姿勢の標準は横から見たとき弓形とされています。また、訓練により翼を羽ばたかせずに止まり木を渡る「トラベリング」という動作を修得させることもあります。

※その他の姿態を鑑賞する品種：巻き毛カナリア(フリルド)、グロスターカナリア、ヨークシャーカナリア、ノーウィッチカナリア、ボーダーカナリア(巣引きが上手いので細カナリアなどの仮母として利用されます)

#### ③ リザードカナリア

羽彩を楽しむ品種で、現存するカナリアで最も古いタイプとされています。体の大部分に鱗状の斑紋があり羽毛は絹のような光沢があります。

※その他の羽彩を鑑賞する品種：ロンドンファンシーカナリア

#### ④ カラーカナリア(赤カナリア、レモンカナリア、白カナリアなど)

赤カナリアは、カナリアとショウジョウヒワとの交雑種を元に品種改良されて作出された品種で、羽毛の色が換羽期間中の餌によって変化します。これは羽毛に血液が通っている時だけ色揚げ飼料が効果を発揮することを示しています。赤カナリアでは羽毛に鱗状の斑紋がない「無覆輪(むふくりん)」と斑紋のある「有覆輪(ゆうふくりん)」があります。レモンカナリアではそれぞれ「極黄」「淡黄」と呼ぶ場合もあります。

### (2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

前述のように鑑賞目的は様々ですが、いずれの場合も巣引きが大きな楽しみの一つですので、通常1つがいごとにカナリア用の庭箱で飼育します。金かごで飼育する場合は正面以外を段ボールなどで囲い鳥が落ち着いて営巣できるようにします。なお、鳴き声の鑑賞やつがいの相性をみる場合には金かごや竹かごに1羽飼います。その他はフィンチと同様ですが、繁殖用には血型のワラ巢(皿巢)をもちいます。

### (3) 飼い方のポイントと注意点

雌雄判別の最も確実な方法はオスの(さえず)りですが、若鳥や換羽期のオスは(さえず)らないので、体型による判別や総排泄腔の形状による判別を行います。体型の雌雄差は、オスはメスに比べて骨太の骨格で大きく、尾羽も長い点を見分けます。総排泄腔による判別は鳥の腹面を上にして保定し、下腹部に息を吹きかけ総排泄腔を露出させて観察します。オスの総排泄腔は細長く突出しています。メスは突出が無く、下腹部に丸みがあります。この方法は熟練を要するので機会があれば練習を積むことが大切です。

カナリアの主餌は、ヒエ、アワ、キビ、カナリーシードの他にナタネ、エゴマなどの脂肪種

子を全体の2～3割程度加えて配合します。その他の飼料としてボレー粉や青菜を与えるのはフィンチと同じですが、赤カナリアの換羽期には黄色の色素を増やすルテインを含む青菜、卵黄、ナタネなどの給餌は避け、カロチンを含む専用の色揚げ飼料やビタミンサプリメントを与えます。これによりオレンジがかかった色への退色を防げますが、与えすぎると肝臓を悪くすることがあります。なお、換羽期の飼料管理として、換羽前期（抜けはじめ）には飼料のカロリーを下げ、早く古い羽を落とし、その後、一気に高カロリーの飼料に切り替えて美しい羽を揃えるテクニックがあります。この方法はほとんどのフィンチにも共通して使えます。換羽期間を短くすることで鳥の負担も軽減でき、その後の巣引きもしやすくなります。脂肪種子を好んで食べることもあり、便はフィンチと異なりべっとりとしていて、金網やかごの底に付くと取れにくく不衛生になりがちです。脚について固まってしまうと爪が欠けたり、脚を傷めますので注意してください。

#### (4) カナリアの繁殖

巣引きは確実な雌雄判別と相性のよい鳥をつがいにするところから始まります。春の日差しが強くなり始める頃に繁殖期を迎え、皿巢に巣材を選び始めます。この頃からゆで卵の黄身や粟玉などの発情餌を与え交尾、産卵を促します。抱卵期間は14日、その後14日位で巣立ちしますが巣立ち後1週間程度は親から餌をもらいます。自分で餌を拾うようになったら親から離し、別飼いします。親鳥は夏までの間に2、3回繁殖を繰り返します。雛は巣立ち後2～3カ月で換羽し、翌年の春には繁殖可能な成鳥になります。

### 3. キュウカンチョウ（九官鳥）

#### (1) 分類、品種

インドから東南アジア、中国にかけて分布するムクドリ科の鳥です。体の大きさと肉だれの具合によって数種の亜種がみられます。以前は大量に輸入されていましたが、最近ではCITESのII類に登録されたこともあり、輸入数はかなり減少しています。ものまね鳥として有名なこの鳥は、飼育下での繁殖が難しいことでも有名でしたが、DNAによる雌雄判定の結果、つがいを実際に作るができるようになり、海外では人工繁殖が行われつつあるようです。

#### (2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

一般的には、1羽をキュウカンチョウ用の竹やプラスチック製のかごで飼育します。餌、水入れは専用のものが市販されています。陶器とプラスチック製の物がありますが、陶器製の方が安定もよく衛生上も好ましいでしょう。寒さに強くありませんので、冬季の保温器具を用意しましょう。

#### (3) 飼い方のポイントと注意点

雑食性の鳥で成鳥にはキュウカンチョウ専用のペレットフードを、芯が残らないように軟らかくふやかしたものと、果物（リンゴ、バナナ、桃など）や蒸かしたサツマイモをさいの目に切って与えます。たまにミルワームやコオロギなどの生餌を与えます。その他、ビタミンなどのサプリメントはペレットフードに混ぜて与えます。雛や若鳥にはペレットフードだけでは栄養が不足するので、生肉やレバーを少量与えるか、または5～7分のすり餌に果物や卵黄を練り込んで少し軟らかめにして与えます。キュウカンチョウは軟便の鳥です。汚れたかごや止まり木の糞で細菌が繁殖し、脚部の感染症になることがありますので洗浄はこまめに行います。また、水浴びはシャワーなどを利用して定期的にさせます。

#### ※おしゃべりの教え方

一般にインコ類よりもキュウカンチョウのほうがはっきりと人の声に近い声で話すといわれます。能力に個体差があることはいうまでもありませんが、根気よく教えれば、ほとんどのキュウカンチョウは言葉を覚えます。一般的に男性の声よりも女性や子供の甲高い声の方が覚えやすいといわれています。ポイントは、

- ・鳥が集中できる静かな場所を選び、かごのそばに座って行います。

- ・毎日何回かに分けて1回の練習は5分位にします。
- ・短い言葉からはじめて一つの言葉を覚えてから次に進みます。
- ・長い言葉は「もしもし」「もしもしかめよ」と少しずつ伸ばしていきます。

以上の注意点を参考にして気長に訓練してください。

## 4. すり餌鳥（軟食鳥）

### (1) 分類、品種

メジロ、うぐいす、ホオジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、オオルリ、ヒバリなど国内で身近な鳥から、ソウシチョウ、キュウカンチョウなどの外来種の鳥もふくめて、「すり餌」というわが国独自に発達した餌を使って飼育する鳥類の総称で、分類上の種別ではありません。例えばホオジロは播餌で飼育すればフィンチといえますが、すり餌で飼えばすり餌鳥ともいえます。

また、ソウシチョウ、ガビチョウ、ホオジロガビチョウ、ホオグロガビチョウの4種類の鳥については、外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）の特定外来生物種に指定されています。

### (2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

すり餌鳥は通常「さしこ」と呼ばれる竹製のかごで飼育します。大きさは鳥種によってメジロ用の8.5寸から1尺6寸くらいまで、1寸刻みにあります。一般に関西地方では関東より一回り小さいかごを用います。また鳥の習性に合わせた、ヤマガラかご、ヒバ리카ごなど専用のかごや水浴び専用かごもあります。餌入れは「餌ちよこ（ちよく）」水入れは「なつめ」という陶器のものを使用します。すり餌による鳥の飼育は鳴き声の鑑賞目的が大半で、鳥期を過ぎれば再び野に帰すことが一般であったため、長期にわたる飼育、繁殖については飼育目的の対象外であり、一時的に飼うための機材しか開発されていません。

### (3) 飼い方のポイントと注意点

すり餌は、わが国で数百年前から利用されてきた飼育技術で、その範囲は、果食型、蜜食型、虫食型、雑食型の鳥に幅広く利用できます。

すり餌の材料は、植物質（米ヌカ、玄米粉、大豆粉、小麦粉）と動物質（魚粉）に大別されます。植物質の材料を上餌とよび動物質を下餌とよびます。上餌は、それぞれ煎って乾燥させ、粉末状にして使用します。下餌は塩分の低い川魚を乾燥させて利用し、脂肪分の調整のため魚の種類（一般にはフナを使いますが、特殊な場合には、山女、はや、なども使われました）や内臓の有無など加工方法を選びます。すり餌の「～分餌」とは上餌の重量に対する下餌の重量比を表します。例えば3分餌とは上餌100に対して下餌30の混合物であることを示しています。下餌の多い餌を強餌、少ない餌を弱餌とよびます。何分の餌を選ぶかの選択は虫食の傾向の強い種類ほど動物性たんぱく質の多い「強餌」を用い、季節や成長などを考慮して強弱を調整します。寒期や成長期の雛鳥には通常より1～2分強めの餌を与えます。関東では3分、5分、7分、関西では2分、4分、6分が標準品として市販されています。これは関東に比べて関西が温暖であることから、少し「弱い餌」が適当とされたからです。すり餌の作り方は、1羽当たり手の平に半分程度の青菜をすり鉢でよく摺ることから始めます。その中にすり餌を加え水で固さを調整しながら練ります。メジロのような蜜食性の鳥は軟らかく、穀食や虫食の鳥は固めにします。水分を加えるため、すり餌は腐敗し易いので1日朝昼2回、夏季は3回程度新しく作り直す必要があります。すり餌鳥の補助飼料として、鳥の食性に合わせて、みかん、りんご、柿などの果物や蜂蜜、クヌギやピーナッツ、エゴマ、麻の実など木の実や穀物などを与えます。虫食の鳥にはミルワーム、青虫、くも、バッタやコオロギの幼虫などの生餌やロード（豚の脂身）を時折与えます。なお、飲水及び水浴び用の水は常時新鮮なものを与えてください。

## 5. セキセイインコ

### (1) 分類、品種

オウム目インコ科に属し、オーストラリア原産です。頭部が黄色で全身が緑色、後頭部から翼にかけて黒い斑紋がたくさんある原種から、200年以上にわたって飼育され、いろいろなタイプに改良されてきました。地色の変化し、黒い斑紋が退色したり減少したり巻き毛になったり、そして体格が大型化したものがあります。代表的な品種は、ルチノー、ハルクイン、オパーリン、オーストラリアンパイドなどで、非常に多くの品種が作り出されています。

(2) 生態、習性、生理

体長は18cm、体重26～29g、野生では、オーストラリアの乾燥地帯に群れで生活し、雨が降るとその後、繁殖行動に入るといわれています。雨で草が伸び、餌が多くなるのに合わせて繁殖するのです。そういった習性があるので、餌の豊富な飼育下では仲のよいペアなら季節に関係なく繁殖します。巣は木の穴などに作ります。一産4～6個の卵は18日ほどでふ化し、30日ほどで巣立ち、成鳥の色になるには3～4ヵ月かかります。

飼育していると大体10年前後は生きそうですが、上手に飼うと15年以上生きる個体もいるようです。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

金かごで十分飼育、繁殖できます。繁殖を目的で飼育する場合は箱巣を入れる必要があるので、大き目のものがよいでしょう。かごの置き場所は、夏は涼しく直射日光の当たらない場所、冬は暖房は必要ありませんが暖かく風の当たらない環境に置きましょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

非常に丈夫な鳥で、餌はヒエ、アワ、キビにカナリアシードを加えたインコ用混合飼料を主食とし、青菜も与えましょう。カルシウム補給としてイカの甲も必要です。塩土も与えたほうがよいでしょう。

餌の量は1～2日で食べ切る量にして、餌の追加や総入れ替えは栄養のアンバランスを引き起こしますので避けるべきです。身体の小さい鳥は体力がないので、いつも餌があることを必ず確認してください。もちろん水は毎日取り替えます。

手乗りで育てる場合には、餌に関することが一番重要です。まず、どういった餌を使うかということですが、一番よいのは最近市販されているパウダーフードを使うことです。これはインコ類の人工育雛用に開発されたもので、ビタミンやミネラルなど必要な栄養分が含まれているので、これをお湯で溶いて、40度程度に冷ましてスプーンで与えましょう。お湯の量は雛が小さい頃にはパウダーフード1に対してお湯9、成長と共に徐々に濃度を上げ、最終的には2対8ほどの濃度にします。給餌間隔も始めは3時間程度あけますが、餌の濃度を濃くすると共に給餌間隔も徐々にあけていきます。与える量は、雛が食べるだけ与えてもかまいません。古くから使われているアワ玉にこのパウダーフードを加えても雛を育てることができます。

雛を飼育する入れ物ですが、雛には保温が必要です。そこで、わらでできたふごやプラスチックケースに入れ、寒い時期にはその下に保温マットを置くなどして、暖めてあげましょう。

手乗りで人が育てる場合、親鳥と同じ餌を置き、それを食べるようになって、羽が生えそろうと親鳥と同じくらい大きになったら（生後約1ヵ月）、かごに移しましょう。

ひとりで餌を食べるようになって、できるだけ一緒に遊んで、コミュニケーションをとることが、手乗りインコを楽しむコツです。

## 6. 中型インコ類

(1) 分類、品種

中型インコと一般的に呼ばれるものは、オウム目の鳥の中でセキセイインコより大きく、ボウシインコ類よりは小型の種類です。具体的には、オカメインコ、ボタンインコ類、クサインコ類、ホンセイインコ類、メキシコインコ類、アケボノインコ類、ヒインコ類などが含まれます。

オカメインコはオウム科に属していて、原種は灰色で頭部が黄色で頬に赤い班がありますが、

その色変わりとしてシロオカメインコ、パール、パイド、ホワイトフェイス等があります。

ボタンインコ類では、野生種としてはキエリクロボタンインコ、ルリゴシボタンインコ、コザクラインコがよく知られています。これらは飼育されてきた歴史が長いため、数多くの品種ができており、ヤマブキボタンインコやブルーボタンインコ、シロボタンインコといった品種ができています。コザクラインコは、非常に色変わりが多く、イエロー、タイガー、モーブ、バイオレットといったような品種が数多く作られています。

クサインコ類にはナナクサインコ、アカクサインコ、ビセイインコ等があります。近年これらにも色変わりが出現し、オウゴンビセイインコやブルーのアカクサインコなどがあります。

ホンセイインコ類は東南アジアに生息しており、ワカケホンセイインコやオオホンセイインコなどがあります。両種ともルチノーやブルーといった色変わりが出ています。

メキシコインコの仲間は、中米から南米にかけて生息しており、コガネメキシコインコやテツバメキシコインコ、クロカミインコなどがあります。

アケボノインコ類は、中南米に生息し、アケボノインコ、メキシコシロガシラインコなどがあります。

ヒインコ類は、インドネシアからオーストラリアにかけて生息し、ヒインコ、ズグロオトメインコ、ゴシキセイガイインコなどがいます。

## (2) 生態、習性、生理

中型インコといっても、単にその大きさだけで分けられているので、その生態、習性などは様々です。

ボタンインコの仲間は、アフリカのサバンナなどに生息していて、つがいの仲がよくラブバードといわれます。そして、インコの仲間では珍しく、巣材を運びます。鳴き声はかなり高く、騒々しい種類です。寿命は10～15年くらいです。

オカメインコは、オーストラリア原産で、性質が穏やかで他の小鳥と同居しても大丈夫です。寿命は15～20年くらいです。

ヒインコ類は、花の蜜や果汁を食べるのに適応し、舌の先がブラシ状になっており、その食性のため糞は水分がとても多いです。また、鳴き声はキーキーとかなり高く、かなりうるさい種が多いです。寿命は20年以上です。

メキシコインコ類は、中南米に生息していて、オカメインコと同じくらいか、少し大きい鳥たちです。非常に声がやかましく、活発な性質です。人には慣れやすい鳥が多いようです。寿命はやはり15年ほどです。

アケボノインコ類は、中南米産で、体形はボウシインコ類そっくりですが、より小型で、ハトより一回り小さいくらいです。性質はおとなしいものが多いようです。寿命は20年以上生きるといわれています。

## (3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

飼育するには、金かごか禽舎が適しています。オカメインコやボタンインコの仲間は、大きな金かごに市販の巣箱をつけることによって繁殖することも可能です。他の種類は手乗り以外なら、禽舎で飼育するのがよいでしょう。ただし、メキシコインコ類は非常に破壊的なので、木製の部分はトタンなどでカバーしたほうがよいかもしれません。

## (4) 飼い方のポイントと注意点

餌は、基本的にはセキセイインコ用の混合飼料に若干、ヒマワリや麻の実を加えるとよいのですが、太りやすいのでかご飼いの場合は少なめに与えましょう。これに青菜や少量のリンゴなどの果物を与えます。イカの甲などもカルシウム補給として与える必要があります。

最近市販されているインコ用のペレットは、栄養価が高く、ビタミンなども追加されているので、混合飼料の代わりにペレットを使用するのもよいでしょう。

アケボノインコやメキシコインコの仲間は、他の中型インコよりも果実や野菜などの副食を多く与えましょう。

ヒインコ類については、他のインコ、オウム類と食性、生態が違うので、当然与える餌も違います。ヒマワリの種子やカナリアシードを食べる個体もありますが、基本的には果実食の鳥なので、出来るだけ多く果物や野菜を与えます。また、最近ではヒインコ類用の人工飼料も販売されていますので、これらと果物、野菜で飼育するとよいでしょう。

新鮮な飲み水を与えることはいうまでもありませんが、水浴びをさせることも健康を維持するのに重要です。自分で水浴びをしないようなら、霧吹きで水浴びをさせましょう。もちろん、嫌がるようなら無理にしないでかまいません。

冬の温度については、ボタンインコ類やオカメインコなどは成鳥なら無加温で大丈夫ですが、風の当たらない暖かい所に置きましょう。他の種類も同様なものが多いのですが、ヒインコ類の一部の種やアケボノインコ類などは若干保温したほうがよいでしょう。いずれにせよ、本来、日本より暖かい国が原産です。寒さに耐えられるといっても、無理はしないほうがよいでしょう。

手乗り用の雛から育てる場合、餌は最近市販されているパウダーフードを使ったほうが丈夫に育ちます。ボタンインコ類やオカメインコ類の場合は成長が少し遅いですが、セキセイインコの項を参照してください。アケボノインコ類、メキシコインコ類やヒインコ類は、大型のオウム・インコ類に比べて成長はかなり早いのですが、育て方は同じなので、そちらを参考にしてください。

## 7. 大型オウム・インコ類

### (1) 分類、品種

代表的な大型のオウム・インコ類は、東南アジアからオーストラリアにかけて生息する白色系で、尾が短く冠羽のあるコバタン、キバタン、タイハクオウム、モモイロインコ、クルマサカオウムなどと南米産で全身が緑色のポウシインコ類（キソデポウシインコ、キホオポウシインコ、キビタイポウシインコ）それに同じく南米産で尾が長いルリコンゴウインコやベニコングウインコ、アフリカ産の全身が灰色で尾が赤いヨウムもよく飼育されています。

### (2) 生態、習性、生理

ほとんどの種が熱帯に生息していて、果物や木の実、花、木の芽などを食べて生活しており、非繁殖期には群れで生活し、繁殖期になるとペアで生活します。

大きさはコバタンやモモイロインコ、ポウシインコ類、そしてヨウムはハト位の大きさで、300~400g弱の体重です。タイハクオウムやキバタンは600g程度、ルリコンゴウインコやベニコングウインコなどはニワトリ大で1kgを超える体重です。

コバタンやモモイロインコ、タイハクオウムは目の虹彩を見るとオスメスがわかります。若鳥のうちははっきりしませんが、オスは虹彩が黒く、メスは茶色だからです。

寿命については、飼育下で30年以上生きることができます。中には50年以上生きた記録もあります。

### (3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

嘴の力が非常に強く、金属のかごでも丈夫なものでないと簡単に壊してしまいます。特にコンゴウインコ類や大型のボタン類には、しっかり溶接されたかごが必要です。かごの大きさは、基本的には大きければ大きいほどよく、少なくとも翼を広げられる程度の大きさは必要です。冬季の温度については、初めて冬を越す場合は、15度以上に保つ必要があります。1回冬を越していれば、次の冬からは無加温で大丈夫です。しかし、寒さに耐えられるというだけであり、熱帯の鳥なので、できるだけ暖かい環境を整えるべきです。

### (4) 飼い方のポイントと注意点

飼料については、以前はヒマワリの種子と麻の実、それにバナナなどを副食として与えるというのが一般的でしたが、現在は多くの大型種用のペレットが市販されていますので、こういったペレットを主食として、バナナやリンゴだけでなく、ブドウ、マンゴーなどの果物やニン

ジンやサツマイモ、ブロッコリー、トマトなどの野菜、時期によって入手しやすいものを毎日、1種類の量は少なく種類を多く、副食として与えるとよいでしょう。ヒマワリの種子や麻の実などを主食とすることも出来ますが、この場合、ヒエ、アワ、キビやハト用の配合飼料なども主食の一部として加えることが必要です。もちろん、この場合も上記の副食を与えましょう。

大型のオウム・インコの飼育で気をつけなければならないことのひとつが、肥満です。肥満になるかどうかは、運動量、餌、その種特性によって決まります。コンゴウインコ類は、野生でも脂肪分の高いヤシの実などを主食としているので、果実などが主食のボウシインコ類やバタン類に比べると高脂肪のヒマワリの種子などで飼育しても、太りにくい傾向があります。それでも、狭いかごで運動不足だと肥満になってしまいますし、オウム類やボウシインコ類はなおさらです。オウムの場合も肥満になりやすいので注意しましょう。

健康管理には水浴びも必要です。ほとんどの大型のオウム・インコは自分では水浴びはしませんが、シャワーをかけると喜んで羽を広げて水浴びをします。暖かい日の午前中に出来るだけ水浴びをさせてあげましょう。オウム類はこの水浴びによって、羽毛から出る粉が洗い流され、かごやその周囲が汚れるのを減らすことが出来ます。

大型のオウム・インコは、最近では手乗りとして、雛鳥が市販されています。これらを育てるにはかなりの時間と根気が必要です。種類にもよりますが、雛が自分で餌を食べようになるのは3ヵ月～4ヵ月、場合によってはそれ以上になります。ある程度育って、自分で餌を食べ始めたくらいのほうが、飼い易いでしょう。

自分で雛を育てる場合には、餌と環境（温度、湿度など）が重要です。餌については、人工育雛用のパウダーフードを使用します。これを温めて与えるのですが、問題は水分量です。雛の育ち具合や状態にもよりますが、水分量を85%前後にします。この餌をお風呂のお湯程度の温度に温めて与えます。与える道具は、大型の金属スプーンの両端を曲げたものや、給餌用の先が太くて長くなっている注射器です。与える際には片手で雛の嘴の脇をおさえ、スプーンを上嘴につけるようにすると、雛は自分で反応して、頭を上下し、その動きで餌が入っていきます。注射器の場合は、嘴の間に先端をくわえさせて、雛の反応に合わせて餌を流し込みます。給餌回数は30日齢で3～4回、50日齢くらいで2～3回くらいですが1回に食べさせる量とまた、その餌の濃度によります。毎日体重を計り、体重の伸びを記録しましょう。餌の量が不足していたり、濃度が薄いと体重が伸びません。ただ、モモイロインコなどでは50日齢前後で、ルリコンゴウインコなどでは60日齢位で体重が最大になり、その後多少体重が減少します。これは巣立ちの準備段階に入ったということであって問題はありません。この状態になったら置き餌して自力採食を促します。

環境については、まず、温度についてですが、筆毛の状態の時には32～33度くらいはあったほうがいいのですが、雛が喘いだり、呼吸が早いようなら徐々に温度を下げていきます。湿度については75%くらいを保てれば理想的です。こういった状態を保つには、家庭では大きなプラスチックケースや発泡スチロールの箱に保温ランプや保温マットをつけ、サーモスタットで調整するのがよいでしょう。雛の糞はかなり水っぽく、また量も多いので、ペーパータオルのちぎったものなどをたくさん敷きましょう。筆毛の頃はまだ、脚や関節も柔らかく、すぐに開脚してしまいます。雛の体よりふたまわりくらい大きいザルなどに雛をいれると開脚は防げます。これを保温箱にいれるとよいでしょう。

体の筆毛が開いて尾羽が伸び始めたら、巣立ちの準備段階ですから、もう少し温度を下げ、床が滑らないようにして、広いところに出しても大丈夫です。行動を見て、低い止まり木も入れましょう。いつも止まり木に止まるようになったら、かごに移しても大丈夫です。

手乗りのオウム・インコたちは、人間に刷り込まれているので、飼い主の愛情がたくさん必要です。かまってもらえないと毛引きになったり、人間に対して攻撃的になったりします。また、上手に飼えば数十年も生きる鳥たちです。責任を持って飼育しましょう。

#### (5) その他特記事項

大型のオウム・インコム類は、非常に鳴き声が大きく、鳴き叫んでいるときには、近くで話が出来ないほどです。鳴くのは朝や夕方が多く、何かで興奮したときなども鳴き叫びます。

近隣の方に迷惑がかからない環境での飼育をお勧めします。

## 8. ハト類

### (1) 分類、品種

ハトはハト目ハト科の鳥類で、約300種います。そのうちよく飼育されているのは、カワラバトから改良されたといわれているレースバトやクジャクバト、ジャヤコビンなどの品種でしょう。その他にジュズカケバト、ウスユキバトがよく飼育されています。ギンバトはジュズカケバトから改良された真っ白なハトであり、ウスユキバトも白色や淡色となった色変わりがいま

す。大きさは大小さまざまで、小さなヒノマルヒメバトは全長13~15cm、体重49gほどで、大きなカンムリバトでは全長66~75cm、体重1,800~2,000gにもなります。”

### (2) 生態、習性、生理

ハトの仲間は種子や果実が主食で、大量に水を飲み、飼料が十分にあり、栄養状態がよければ通年繁殖できます。1回に2個の卵を産み、抱卵をはじめて18日で雛がcaえります。その雛を素囊から分泌されるピジョンミルクという分泌物で育てるのがハトの仲間の特徴です。

いったんつがいになると、どちらかが死んだりしない限り、ずっと連れ添います。20年くらい生きるということもありますが、一般的には10~15年位が寿命のようです。

### (3) 飼育上の必要な施設、器具、機材及び環境

ウスユキバトやジュズカケバトは大型のかごで飼育、繁殖することができます。レースバトはハト小屋で飼育するのが一般的です。ハト小屋は、内部に巣箱とハトのためのトラップのついた入り口、到着台があることが必要です。トラップはハトが中に入れても外には出られないようにするものです。到着台はこの入り口の前につけます。クジャクバトやジャコビンなどは禽舎や小屋で飼育するほうがよいでしょう。

かごなどで飼育する場合、ウスユキバトでも保温は必要ありませんが、冬は風のあたらない暖かい場所、夏は直射日光のあたらない涼しい場所におきましょう。

レースバト用のハト小屋の場合、屋根やベランダに設置して、ハトが帰ってくる際に見つけやすいようにすることが必要です。

### (4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ウスユキバトやジュズカケバトは小型なので、ヒエ、アワ、キビ、それにカナリアシードなどを混合したインコ用の混合餌に少量の麻の実を混ぜるとよいでしょう。青菜も与えるべきで、ハト用の塩土も必要です。レースバトやクジャクバトなどの場合、市販されているハト用配合飼料を与えるのが一般的です。内容はコーン、サフラワー、マイロ、豆類などが入っています。これに加えてビタミン補給のため青菜を与えましょう。ミネラル補給のための塩土も欠かせません。

ハト類は多量に水を飲むので、給水器などで水を切らさないようにすることが必要です。また、水浴びも好むので、水浴び用に大きな水入れを別に用意しましょう。

### (5) その他の特記事項

ハト類に限りませんが、糞や羽毛がアレルギーの原因になったり、ハト自体は健康に見えても、人間にもうつる病原菌を持っていることがあります。あまり神経質になることはありませんが、掃除をこまめにする、ハト小屋に入る際はマスクをする、世話をした後にしっかり手を洗うといったことを守りましょう。

## 9. ニワトリ

### (1) 分類、品種

ニワトリはキジ目キジ科のセキショクヤケイから改良されてきたといわれています。セキショクヤケイは東南アジア原産で、現在でも生息地では飼われているニワトリと交雑しているといわれています。ニワトリを大きく分けると、卵用、肉用、卵肉兼用そして愛玩用に分けられます。卵用として有名なのは白色レグホン、肉用は白色コーニッシュ、兼用はオウハンプリマスロックなどがあります。ペットとして飼育されるのは、チャボやウコッケイ、コシャモなど小型の愛玩用がほとんどで、チャボにはシロ、カツラ、ゴイシなど羽毛の色の違う品種があり、また尾羽の退化したウズラチャボなどもあります。ウコッケイにもシロとクロがあり、コシャモにもアカザサ、シロ、スズナミなどの体色があります。

(2) 生態、習性、生理

本来のセキショクヤケイは雑食性で、地上で種子や昆虫を食べ、巣も地上に作ります。夜間は外敵から攻撃されないよう、樹上で眠ります。そして、テリトリーを持ち、一夫多妻です。ニワトリもこの先祖の習性を受け継いでいます。セキショクヤケイは繁殖期になるとメスが10個程度の卵を産み、その後抱卵をはじめます。卵用の品種では、こういった習性を抱卵しないで、卵を産み続けるように改良し、現在では年間300個以上産卵するようになりました。しかし、産卵には日照時間も関係し、羽が生えかわる時期には産卵しません。愛玩用のチャボやウコッケイは年間に数十個程度しか産卵ませんが、就巢性が強く、抱卵育雛が上手です。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型のチャボなどは、市販されているチャボ用の金かごで飼育することもできますが、できれば禽舎で飼育した方がよいでしょう。南向きの西日の当たらない所に禽舎を作りましょう。また、冬季は風が直接当たらないようにします。体が入るくらいの木製の箱を設置するとそこに産卵します。床には乾いた砂を敷くと掃除しやすく、また、ニワトリは砂浴びができます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料は、市販されているニワトリ用の配合飼料がよいでしょう。しかし、これだけではビタミンや素繊維が不足してしまいます。配合飼料に加えて、青菜類をできるだけ多く与えましょう。ハコベなどの野草もよい餌となります。時々、ミルワームなど昆虫を与えると喜びます。配合飼料はかびたりしやすいので、1日で食べきる量を毎日与えましょう。水も勿論、毎日新しくする必要があります。

一般的には、複数で飼育しますが、オスが2羽以上いると喧嘩する場合がありますので、オスは1羽だけにしましょう。

(5) その他特記事項

ニワトリは鳴き声が大きいのので近所迷惑にならないところで飼育しましょう。

## 10. キジ類

(1) 分類、品種

キジ科には、全長12~15cm、体重20~57gのスズメ位の大きさしかないヒメウズラから全長180~250cm、体重は5kg近くになるインドクジャクまで、約210種類がいるといわれています。その中で、比較的多く飼育されているのは、ヒメウズラ、ウズラ、キンケイ、ギンケイ、インドクジャクなどでしょう。

キンケイには全身が退色した品種があり、オウゴンキンケイと呼ばれています。ヒメウズラにも退色したものがいます。インドクジャクでは全身が白いシロクジャクがいます。

(2) 生態、習性、生理

キジ科は鳥の中では脚力が強く、普段は地上で歩き回って生活しています。翼は長距離を飛翔するには適していませんが、敵に襲われると数十メートル以上飛んで逃げます。

オスは縄張りを持ち、抱卵、子育てはメスだけが行うのが一般的です。

雑食性で、草の種子や花、昆虫、トカゲなどの小動物も採食します。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型のヒメウズラやウズラは大型の鳥かごでも飼育できます。キンケイやギンケイは1坪以上の禽舎を準備します。インドクジャクにはオスの尾羽が折れないように2坪以上の大型の禽舎を準備します。禽舎は、夏は涼しく、直射日光が当たらず、冬は暖かく、風の当たらない場所に作りましょう。鳥かごの場合も禽舎と同じ環境におきましょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料は市販されているニワトリ用の配合飼料が使いやすいでしょう。ただ、この配合飼料のみでなく、青菜類もできるだけ与えるようにしましょう。ハコベなどの野草も非常によい餌となります。また、基本的には雑食性なので、時々ミルワームなどの昆虫を与えることも必要です。ヒメウズラは小型なので、小鳥用のヒエ、アワ、キビなどで飼育できます。

飼育する場合、繁殖期にはオス同士が闘争するので、オス1メス1のペアまたはオス1羽に複数のメスを1つの鳥かごや禽舎に収容します。キジ類では繁殖期にオスがメスを追いまわすことがあるので、1ペアで飼育するより、メスを複数入れることで、オスからの攻撃を分散することができます。また、植え込みや隠れ場を設けることにより、オスからの攻撃を避けることができます。

(5) その他特記事項

インドクジャクは鳴き声が大きいため近所迷惑にならないところで飼育しましょう。

## 11. 水禽類

(1) 分類、品種

水禽類カモ目カモ科に分類される鳥類で全世界に147種類が知られています。全長30~36cmのアオマメガンやオオハクチョウのように全長140~165cm、体重7,500~12,700gにもなる大きな種類もあります。いずれも指の間に水かきがあり嘴の先端に嘴爪があることなどが特徴になっています。一般的に飼育されているのは、マガモから改良されたアヒル、サカツラガンやハイイロガンから改良されたガチョウ、それにオシドリやコブハクチョウです。アヒルには品種として、アオクビアヒルや白いペキン、ガチョウにはシナガチョウやツールーズ、エムデンといった品種があります。

(2) 生態、習性、生理

野生種は、ほとんどが北方で繁殖し、渡りをして南方で越冬するという習性があり、このために雛の成長は早く、春に生まれ秋の始めには飛翔できるようになります。コブハクチョウも同様で、野生の場合は渡りをします。また、この渡りをするために親鳥は夏の間に羽が抜け変わります。

餌は種子や水草、水生昆虫などで、基本的には草食性の強いものが多いです。

家禽化されたアヒルやガチョウは大型化し、ほとんど飛翔することはできません。一方で、品種によってはより多く産卵するように改良され、年に300個以上産卵するアヒルもいます。しかし、家禽化されてきた過程で、就巢性が失われており、人工孵卵育雛して雛を育てる必要があります。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

飼育に必要なのは、少なくとも十分に水浴びのできるプールがある禽舎です。アヒルやガチョウは飛べないので問題ありませんが、オシドリやコブハクチョウは断翼してあれば、周囲を囲った池などで飼育することもできます。この場合は、ネコやカラス等の害獣に襲われないようにしなければなりません。

コブハクチョウは大型の鳥なので、かなり大きな池が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ニワトリ用の配合飼料と小松菜などの青菜類が一般的です。池に餌をそのまま撒くと配合飼料は沈んでしまい、また、池の水が汚れるので、別のバットなどに入れて与えたいほうがよいでしょう。

アヒルやガチョウは群れで飼育できますが、コブハクチョウは繁殖期になると縄張りをもって闘争するのでつがいで飼育したほうがよいでしょう。オシドリは広さがあれば、複数のペアで飼育できます。

(5) その他の特記事項

コブハクチョウは、現在、日本各地で野生化し、繁殖しているところまであります。こういった外来種の移入は日本の生態系に悪影響を与えかねません。逃げ出さないよう十分に注意して飼育する必要があります。

## 12. 猛禽類

(1) 分類

猛禽類には、ワシタカ類とフクロウ類が含まれます。ワシタカ類で比較的飼育されているのは、オオタカ、アメリカチョウゲンボウ、フクロウ類ではメンフクロウ、アフリカオオコノハズク、オオコノハズクなどがあります。

(2) 生態、習性、生理

猛禽類は、ヤシハゲワシなどごく一部の種を除いて、完全な肉食です。小型の種では、コノハズクのように昆虫を主食とする種があり、また、ミサゴのように魚を主食とする種もあります。

ほとんどの種が、縄張りをもち、つがいか単独で生活していて、繁殖期には、かなりよく鳴きます。また、ワシタカ類は昼行性ですが、フクロウ類は一般的には夜行性です。

寿命は、種によって違い、飼育下では、小型の種で10年から15年くらい、オオタカなどは20～30年生きるといわれています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型の種は、かごで飼育することもできますが、狭いかごでは翼を傷めやすいのです。かごで飼う場合は、内側にダンボールなどをつけるとよいでしょう。ただし、通気に気をつける必要があります。自作で鳥の大きさにあった木箱を作ることできます。中型種以上は禽舎や専用の小屋で飼育するほうがよいでしょう。

馴らすために足革をつけてつないで飼う場合、オオタカなどは専用の小屋にTバーにつないで飼育します。チョウゲンボウなどはTバーではなく、ブロックを止まり木にします。

この方法は、知識のある経験者むけで、特に小型種は難しいです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

動物食なので、鶏肉、牛肉などで飼育することが出来ますが、これらのみを与えているとビタミン、ミネラル不足となり、長期飼育は出来ません。そこで、マウス、ウズラ、ハトなど、内臓も共に採食できる餌を与えるべきです。中型種以上は1日1回、小型種では1～2回の給餌が基本ですが、特に大型種は野生でも毎日獲物を捕獲できるわけもなく、1週間に1回程度、状態に応じて絶食させてもよいでしょう。ただし、季節によって採食量も変わるので、絶食もその状態により加減しましょう。

水については、基本的に水分は餌から取っていますが、自分から飲むこともあるので、きれいな水を用意します。水浴びも好むことが多いので、特に暑い時期には大きい水入れを使用しましょう。

猛禽類は、餌が肉類のため、糞の水分が多く、また、たくさんの尿酸が含まれています。かなり臭気もあります。こういったことから、非衛生的になりやすいので、こまめに掃除しましょう。

(5) その他の特記事項

ワシタカ類は、繁殖期や餌をねだる時など、かなり騒がしく近所迷惑になります。迷惑のわからない環境で飼育しましょう。

猛禽類は保護されている種が多く、日本産の猛禽類はすべて飼育することはできません。飼

育できるオオタカは輸入されたものか、輸入されたものから繁殖したものです。フクロウなども同様です。日本だけでなく、多くの国々で猛禽類は保護されており、ワシントン条約で輸入を禁止されている種もあります。購入する際には、正規に輸入されたものかどうか、国内繁殖の場合も合法的な個体なのか確認することが必要です。

また、ワシタカ類のなかには動物愛護管理法に定める特定動物（危険動物）に指定されているものがあります。

## IV. その他

### 1. 野生の雛鳥を保護したとき

野鳥を保護したので、どうしたらよいかという相談があります。いうまでもなく日本国内に生息する鳥は原則飼育禁止です。たとえ落ちていた雛鳥やけがをした鳥であっても届け出が必要です。都道府県の自然保護課や林業課に届け、そこで保護の方法について話し合います。獣医などの保護委員が定められているときはそちらに委ねます。これが通常の方法です。ただ雛鳥を保護したときは、そのような時間的余裕が少なく、とりあえず保護者が面倒を見なければならないことが多くあります。

もっとも多い保護の例としては、巣立ちしたばかりのまだあまり飛べない雛を見かけた場合です。巣立ち雛はほとんど動かずひ弱に見えますが、必ず親鳥が側で様子を見、餌を運んでいます。たとえ猫やカラスに襲われたとしてもそれは自然の摂理であり仕方のないことです。そのままにして立ち去ることが最善の選択です。保護をしてしまって少し時間が空いても元の場所の近くの安全な木の枝などにとまらせておけば、親鳥が見つけて巣に連れ戻します。

次に、羽もほとんど生えそろうていない雛鳥が巣から落ちてしまったと考えざるを得ない場合があります。この場合には巣が近くにあれば、なるべく直接手が触れないようにして、そっと巣に戻してやるのが一番です。但し、病的に弱い雛や、ダニなどの寄生虫が大量に発生して親が世話を放棄した場合があります。この場合には人の手で育てることになります。このような場合、最初にしなければならないのは25～30度程度の保温と寄生虫の除去です。当然飼っている他の鳥からは隔離しなければなりません。次に餌ですが5～7分のすり餌が標準です。練ったすり餌を米粒程度の大きさに丸め、少し水をつけてピンセットで目の前で揺らすようにして、口を開ければすばやく食べさせます。水を含ませた筆でくちばしを濡らしてやると口をあけることもあります。一度、すり餌を食べたあと自分から口を開いて餌をねだるようであれば安心です。食べない場合はあきらめるほかありません。昆虫食の傾向の強い鳥ほど強い餌、すなわち動物性蛋白質の多い餌が必要で、すり餌のほか、ミルワーム、ハエ、青虫、クモなどを適当な大きさに切って与えます。無事に育ってもいずれは自然に戻してやらなければならないので、充分な飛翔のできる大きさの鳥かごや禽舎で飼育し、自然界に戻ったときに自分で餌を捕れるように、すり餌から昆虫など自然にある餌に慣れさせておく必要があります。

### 2. 足環のついている鳥を見つけたら

足環のついた野鳥を保護したり死体を見つけたら、その足環をよく見てください。『KANKYOSHO TOKYO JAPAN』、『KANKYOCHO TOKYO JAPAN』、『KANKYOSHO JAPAN』、『KANKYOCHO JAPAN』のいずれかが刻印されていたら、環境省が標識調査（渡りなどの行動を調査する目的）の為に付けられたものです。この場合は、山階鳥類研究所・標識研究室（04・7182・1107）に連絡してください。

ハトに足環がついていた場合、その個体は個人のレースバトです。その足環をよく見ると電話番号が刻印されていることがありますので、連絡を取るとよいでしょう。また、刻印文字で『JPN』は日本鳩レース協会（0120・810・118又は03・3822・4231）、『NIPPON』は社団法人日本伝書鳩協会（03・3801・2687又は03・3801・2789；足環についている年号と6桁の数字を伝えてください）となりますので、そちらに連絡をしてください。

## V. 参考

<引用及び参考資料>

「小鳥のお医者さん—Q and A式飼育方法」＊／1999／あおば出版

「新 小鳥のお医者さん—楽しく学ぶ飼育のしかた」＊／1999／あおば出版

「鳥類の内科および外科臨床—鳥類の飼育を含む—」Mr & Mrs Harrison著／伊東 登訳／1997／LLL. セミナー

動物由来感染症その診断と対策 編著 神山恒夫 真興交易(株)医書出版部

「Exotic Animal Formulary—エキゾチックアニマルの薬用量マニュアル—」成島悦雄監修／2003／インターズー

・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press／2000

「Parrots of The World」Joseph M. Forshaw／1978

「Parrots : Their Care and Breeding」Rosemary Low／1992

「Hand・Rearing Parrots and Other Birds」Rosemary Low／1991

「Cockatoos in Aviculture」Rosemary Low／1994

「原色飼鳥大鑑 Vol.1」川尻和夫、立松光好／1982／ペットライフ社

「原色飼鳥大鑑 Vol.2」川尻和夫、立松光好／1984／ペットライフ社

「原色飼鳥大鑑 Vol.3」川尻和夫、立松光好／1988／ペットライフ社

「決定版ペットバード百科」デビッド・アルダートン著／誠文堂新光社

「ペットの飼育事典」小学館

「新版鳥獣原色大図説」講談社

「愛玩動物飼養管理士教本（2級）」社団法人日本愛玩動物協会

「飼育読本『手乗り文鳥の飼い方』」社団法人日本愛玩動物協会

「学校飼育動物の診療ハンドブック」社団法人日本獣医師会

「とり情報誌」（ペット新聞）より江角正紀「野鳥のヒナと出会ったら」

\* 印は漫画。

ペット動物販売業者用説明マニュアル（鳥類）

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100—8975 東京都千代田区霞ヶ関 1—2—2

電話：03—3581—3351(代)

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107—0062 東京都港区南青山 1—1—1 新青山ビル西館23階

電話03—3475—1695 FAX：03—3475—1697

発行：2004年3月

【マニュアル研究会委員（50音順）】

委員長 小宮輝之（東京都恩賜上野動物園飼育課長）

佐竹浩之（東京都動物愛護相談センター相談指導係長）

真田直子（小鳥の病院BIRD HOUSE院長）

高木嘉彦（埼玉県こども動物自然公園主任）

西村尚一（社団法人日本愛玩動物協会専務理事）

【イラスト】田村三恵

※ 本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。